かみ☆かみ

蘭 奏芽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
かみ☆かみ

【Ｎコード】
Ｎ３６１７Ｋ

【作者名】
蘭　奏芽

【あらすじ】
貴方の命を救う代わりに私の願いを叶えてください。と、死にかけの少年を救ったのは見た目十二歳くらいの神様（アニメ好き）だった。話を聞くと、一週間で世界が大変なことに！？　二人は力を合わせて世界を救うための戦いを始めるのだった。

プロローグ

――こんな経験をしたことはないだろうか？

例えば、道を歩いていたら、いきなり横から自転車が飛び出して来た。とか、学校でサッカーをしていたら、死角から急にボールが飛んできた――みたいな、自分の意識の外で突然何かがが起こった。というような経験だ。

誰だって一度は覚えがあるだろう。特に珍しいことでもない。

飛び出して来た自転車を避けたり、飛んできたボールを受け止めたり、そんな普通の対処をしたことがあるはずだ。

――なら、同時にこんな経験をしたことはないか？

飛び出して来た自転車を避けようと、飛んできたボールを受け止めようとしたが、突然のことに身体が反応できなかった。

驚きのあまり何もできず、自分の身に起きた危険を回避することができなかった――そんな、突発的な出来事に対処が間に合わなかったというような経験だ。

危ないという周りの声は聞こえるし、自分では避けられるつもりでいる。

だが、頭ではわかっていても、身体が動いてくれないのだ。

“わかっていても動くことができない”――こういう時、咄嗟に身体が動くのは、普段からそういう突発的な事態に慣れている人間か、頭で考えるより先に身体が動く直感的な人間のどちらかだろう。

ちなみに俺は自分で言うのもなんだが、比較的、頭で考えてから行動するタイプだと思っているし、正直今言ったような咄嗟の行動

が出来る人間ではないと思っている。
――だからこそ、俺は最初自分の取った行動の意味が理解できなかった。
「一騎！？」
危ないと思った時は、既に彼女を突き飛ばした後だった。
続いて耳に入ってきたのは、周囲に響き渡る大きなブレーキ音。
そして、背に感じる何かがぶつかるような強い衝撃。
自分の身体が何かに跳ね飛ばされ、鈍い音と同時に地面に叩きつけられる。
――痛みはなかった。
代わりに、焼けるような熱さと身体から流れる血の感触が、徐々に俺の意識を奪っていく。
「一騎！　しっかりしろ、一騎！？」
「あ…ぁ……？」
頭を強く打ちつけたせいか、上手く考えがまとまらない。
一体、何が起こった？　俺は、何をしてたんだっけ？
「……あ、あぁ…やっちまった。人を殺しちまった……っ」
「馬鹿者！　うろたえてる暇があるなら早く救急車を呼べ！」
――あぁ、そうだ。事故にあったんだ。
学校から家に帰る途中、信号を無視して突っ込んできた車に轢かれた。
痛みは感じない。
おそらく、地面に身体を叩き付けた影響で痛覚が麻痺してしまっ

ているのだろう。とはいえ、流れている血の量から考えて、お世辞にも軽い怪我とは言えそうになかった。

「おい一騎、私の声が聞こえるか？　一騎！？」

「……あ…葵……ぶ、無……？」

「あ、あぁ無事だ。お前が庇ってくれたおかげだ」

瀬名葵（せなあおい）――星南高校二年、生徒会長、俺の幼馴染。コイツを庇って俺は車に轢かれた。

とはいえ、実際はただ突き飛ばしただけだ。

庇ったといえば聞こえはいいが、咄嗟に手が出たのは偶然に過ぎない。声を聞く限り大丈夫なようだが、頭を打った影響か視界が霞んで無事な姿は確認できなかった。

「そ、そんなことより自分の心配をしろ！　もうすぐ救急車が来る。それまで――」

顔は見えないが、どうやら本当に大丈夫そうだ。

心配をする彼女の声からは不安こそ伝わってくるものの、痛みを耐えているような様子は感じられない。

「そ……ん…なに……ッ！」

「一騎！？」

「――ッ！」

「一騎！　無理をするな。もう少しで助かるから」

そんなに心配するな――と口にしようとしたが、声が上手く出せなかった。

自分では確認できないが、どうやら今の俺はかなり酷い状態らしい。

思えば、長い付き合いだが、こんなに焦っている彼女を見るのは初めてだ。

「……くっ……ッ……！」

少しでも不安を取り除いてやりたくて「大丈夫だ」と腕を上げようとしたが、やはり身体はいうことを聞いてくれなかった。

（……死ぬのか、俺は？）

自分の状態を振り返ったせいか、急に怖くなってきた。
緊張と恐怖から、心臓と呼吸の音がやたら大きく聞こえ、逆に周囲の音は何やら遠くのもののように感じられる。

「あ…っ、ぐ……」

少し息がし辛いな……と思った瞬間、意識に靄のようなものがかかった。
段々と視界が歪んでくる。
さっきから視界は霞んでいたが、物の輪郭はぼんやりと把握できていた。
だが、今はまるで真っ白なフィルターがかかったように、瞳に映る景色は色彩を失い、世界が回って見える。
おそらく、肉体の機能が低下しているせいで、意識が死へ向かおうとしているのだろう。
とはいえ、このまま素直に死んでやるほど俺は諦めの良い人間じゃなかった。

「く……ッ、ぐっ…が……っ！」

無駄だということはわかっていた。だが、抵抗を止めたらそれで終わりだ。

少しでも身体を動かそうと、声を出そうと試みる。

だが、動かない。口からは呻き声しか出ない。血も止まらない。

――あらゆる全ての現実が、俺を殺そうとしていた。

（く、そ……）

死にたくない。

まだ死ねない。

約束があるんだ。

生きて果たさなきゃならない約束が――

（俺は、こんな所でくたばってやる訳にはいかねぇんだよ……っ！）

だが、いくら頭で否定しても、死神の足音はすぐそこまで迫っていた。

身体が震える。恐怖からではない。血液不足による体温の低下――精神的なものではなく完全に肉体的なものが原因だろう。

どんなに否定しようとも、直感的に俺の身体は死の気配を感じ取ってしまっている。

「一騎……？　おい、一騎！　しっかりしろ！　駄目だ、死ぬな！　一騎、一騎――」

声が、聞こえなくなってきた。

もう、目も開けていられない。

意識の糸が、切れる――

（生きたい……）

生きたい……だが、運命がそれを許してくれない。

身体は、既に限界を迎えていた。

力が、魂が、身体から抜けていく。

絶望の拒絶も、生への渇望も、全てが無に帰そうとしている。

どんなに望んでも、避けられない絶対的なものが俺を迎えようとしていた。

そう、人間にとって、唯一、平等に訪れるもの――『死』が。

『――見つけた』

そして――身体が、意識が、死の沼に落ちそうになったその瞬間、
その『声』は聞こえた。

第一話　神様と契約

「おはようございます」

目が覚めて、最初にかけられた第一声は至極当たり前の挨拶だった。

とりあえず「おはよう……？」と返しながら、ふと視線を上に向ける。視界には一面の白い天井が映っていた。

次に視線を下へ向ける。新たに視界に入ってきたのは自分にかけられた毛布とベッド、そしていつの間にか着せられていた入院着のような服に――『美少女』だった。

僅かに漂ってくる薬品の匂いや今の自分の姿から考えるに、ここは病院で間違いないだろう。

どうやら、俺は一命を取り留めたらしい。

正直、確実に死んだと思ったのだが、神様は俺を見捨てなかったということか。

「……」

改めて目を強く瞑り、ゆっくりと開く。

さて……今、俺は自分の周囲の状況を確認した訳だが、視界に何かおかしなモノが映ったのは気のせいだろうか？

いや、正確に言えば今もまだ映っているんだが――何だ、これは？

普通に考えれば、ここは助かったことを喜ぶべき場面だ。俺だって生き延びたことは素直に嬉しいし、喜びを噛み締めたいとも思う。

だが、その前にどうしてもこの状況――今現在、俺の上に乗っている物体……そう、この『美少女』について詳しい説明を求めたか

った。

「寝癖が付いてますよ」

と、俺の髪をぺたぺた触る、紅と白が特徴的な妙に古めかしい着物を纏った小柄な少女。

腰まで伸びた澄んだ空色の髪が、整った容姿と相まってその可愛さを際立たせている。

何度も言うが、『美少女』――と言って問題ないだろう。

見た感じ、歳は俺よりも少し下、十二前後といった所か。若干浮世離れしたその姿は、普通の人にはない神々しさすら感じさせる。

――そんな彼女は今、何故か俺の上に乗っていた。

何を言っているのかわからないと思うが、安心しろ俺も何が起こっているのか良くわかってない。

とりあえず、どこかで会ったことがあるか記憶を掘り返してみたが、こんな目立つ少女に出会った覚えは微塵もなかった。

つまり俺は今、病院のベッドの上で見知らぬ少女に馬乗りにされている――ということだ。

「……何だ、この状況？」

目が覚めたら、自分の上に知らない女の子が乗っていた。

どういう状況だ？　衝撃的過ぎて笑い話にもならねぇ。実はまだ俺は意識を失っていて、ここは夢の中なんです――とか言われた方がまだ納得できる。

いや、待て。もしかしたら、もうここは死後の世界で俺は今まさにあの世で目を覚ましたのか？　やけに現代風な世界だが、それならこの妙な少女が俺の上で馬乗りになっている現状も辛うじて納得

でき――

「――って、できる訳ねぇだろ！　誰だ、お前！？」

ほっぺたを抓るまでもなく、ここは現実だった。

なら、何で俺の病室に会ったこともない女の子が居る？　しかも、何で当たり前のような顔して俺の上に馬乗りになってるんだ！？

「あはは。それだけ元気なら、もう大丈夫そうですね」

「いや、大丈夫じゃねぇよ！？　全然、大丈夫じゃないよ！」

この奇怪な状況をどう見たら大丈夫と言えるんだ、お前は！？

「？　怪我はもう治ってるはずですけど……？」

はい？　何だ、怪我って？　そんなことはどうでもいいんだよ。別に俺はどこも怪我なんてして――

「……え？」

――怪我が、ない？

ふと我に返ってみると、痛みをまるで感じなかった。

身体を動かしても、傷に響くということがない。

だが、それはおかしい。俺は交通事故にあって大怪我をしたんだぞ？　当然、大怪我だってしたし、自分の感覚では死にかけてすらいた。

常識的に考えて、そんな命に関わるような怪我をして、すぐに痛みが消える訳ない。

痛み止めの影響か？　いや、待て。良く見てみれば、俺の身体には包帯所か絆創膏一つない――否、それ以前に治療をした形跡がな

かった。

「……どういうことだ？」

現実感がなさ過ぎる。本当に夢の中にいるんじゃないだろうか？
いや、意識はハッキリしているし、感覚も現実としか思えない。
なら、この状況は本当に――いや、待て。落ち着け、例えこれが現実でも夢でも、答えは目の前の少女が持っているはずだ。

「なぁ……」
「契約に従い、貴方の命は助けました。次は私の番です……では、行きましょうか。まずは犯人の居所を探さないと――」
「――待てや、このチビ」
「わ、っひゃあああああああっ！　か、髪を引っ張らないでくださいっ」
「俺の上に乗ったまま器用に後ろを向いたお前が悪い。ってか、お前誰だよ？　何で俺の上に乗ってんだよ？」
「質問の度に髪を引っ張らないでください！　答えます！　答えますから！」

若干涙目になりかけていたので、素直に手を離してやる。
すると、人の上で暴れまわっていた少女は、まるで逃げるようにふわっと俺の上から浮かび上がった。

「……ん？」

浮かび上がった？

浮かび上がった！？

「う、浮いたあああああああああああぁぁぁぁっ！？」
「そりゃ、曲がりなりにも神様ですからね。浮くくらいしますよ」
「何を言ってるんですか、当然のことですよ？」――と言わんばかりの態度に、一瞬、俺の方が間違っている気にさせられたがそんな訳がなかった。
ワイヤーか何かで吊り上げてるのか？
いや、初対面の俺にそんなことをする理由も意味もない。なら、何でこの少女は当然のように浮いているんだ？
――いや、待て。それもいろいろ問題だが、今彼女はなんと言った？
「……神、様？」
「はい。そうですけど」
「え、神様って……あの神様？」
「えっと……どの神様かはわかりませんが、正確には護神（ゆずりがみ）と言います。その中でも、私は奇御霊（くしみたま）に属する神ですね」
ゆずりがみ？　くしみたま？
何を言ってるんだこの子は……もしかして電波な人か？
「人じゃなくて神様です。後、電波とかじゃないです」
「！？」
え？　今、俺……声に出してたか？
「いえ、今の私と貴方は魂が一次的に融合しているので、思考の一部を共有できるんですよ」
「へ？　魂が融合？　思考の共有……？」

「はい。その気になれば、口を開かなくても会話が出来ますよ」
そう言うと、彼女は空中で待機していた状態から、今度はベッドの側の椅子へと着地する。
『どうですか？　聞こえますか？』
「！？」
確かに、彼女は口を開いていなかった。
だが、声はしっかりと聞こえた。
いや、聞こえたというのは適切ではない。耳というより、頭に直接響くような感覚だった。
「……」
――言葉が出ない。まさに文字通りだ。
風景的に見れば普通に戻ったのに、状況は先程の馬乗り状態よりも不可解になっていた。
とはいえ、それは当然のことだ。
いきなり宙に浮くわ、自分は神様だとか言うわ、テレパシーは使うわ、挙句の果てに俺の魂が自分と融合している――なんて言われた日にゃ、どう反応すればいいかわからなくなる。
かといって現実問題、普通の人間には出来ないことをいくつもされている以上、彼女の言葉を嘘だと否定することも出来なかった。
「オーケー、わかった。いや、わかってねぇけど……とりあえず、落ち着こう」
「？」
「お前の神様云々は置いておいて……まずは現状を把握しよう」

今の状況はカオス過ぎる。整理すれば現状も少しは落ち着くだろう。

まず、ここは病院で間違いない。事故の後、俺は奇跡的に助かってここに運ばれてきた。ここまでは良い。

次に、目が覚めたら、俺は自称神様に馬乗りにされていた――って、いかん。ここまでで既に意味不明だ。

「奇跡的にっていうより、私が治したんですけどね」

「へ？」

「貴方の怪我ですよ。完治してるはずですけど？」

確かに。痛みがない所か、普段と何も変わらない。

この子が治した？　あの大怪我を？　どうやって？

「契約したじゃないですか。……覚えてませんか？　貴方の命を救う代わりに、私の願いを叶えるって」

そういえば、意識を失う直前、誰かの声を聞いたような気がしなくもない。

その後のことは良く覚えていないが、もしかして俺は本当の神様に助けてもらったのか？

「え？　何？　マジでお前神様なの？」

「はい。そうですよ」

寸分の迷いもなく、笑顔で肯定する自称神様。

おいおい、即答かよ。普通に考えれば、「私は神様です」なんて真顔で言う奴は頭がおかしいと思われるぞ。

とはいえ、これまでの超現象に加えて、あれだけの大怪我が治ったという事実――流石に、冗談とは言い切れなかった。

「マジで神様なのか……」

俺の中の神様のイメージっていえば、杖とか持った爺さんみたいなのだったんだけど……想像は所詮想像ってことか。

確かに、格好だけならそう見えなくもない。けど、やっぱりどう見ても、普通の人間にしか見えねぇぞ。

（……でも、コイツは本当の神様で、俺はコイツに命を救われたんだよな）

って、待てよ。なら、何でコイツは俺の上に馬乗りになってたんだ？

「……いや、待て。それもそうだが、それ以前に何で俺なんかをを助けたんだ？」

この神様の存在を認めるなら、一番最初に疑問に思うべき点だろう。

普通に考えて、俺を助けて彼女にメリットがあるとは思えない。

神様が気まぐれに俺を助けたという線もあるが、それなら彼女が今ここにいる必要はないはずだ。

「えっとですね……」

困ったような表情で「どこから説明したものでしょうか……」と、悩む神様。

「えっと、さっき……契約について話をしたのを覚えてますか？」

「契約……？」

そういえば、俺の怪我を治すのに契約をしたとか言っていたような気がする。

「確か、お前が俺の命助けた代わりに、俺がお前の願いを叶える……とかなんとか？」

「はい。そのなんとかです」

記憶にはないが、あの時の俺は生きるためなら悪魔に魂すら売ったはずだ。

彼女の言う通り、俺はその契約とやらをしたのだろう。

成程な、理解した。何か俺にして欲しいことがあったからこの子は俺を助けたのか。結果として俺は生き永らえ、彼女は目的を果たすためにここにいる。

「それでですね。貴方には、私の依代を探す手伝いをしてもらいたいんですよ」

「依代って……神様が宿るとかなんとかのアレか？」

「はい。人間的に言うと家みたいなものです」

「その依代を無くしたから俺に探すのを手伝えと？」

「いえ、正確には盗まれた依代を取り返して欲しいんです」

「盗まれた？」

おいおい、神様の依代なんてそんな簡単に盗めるものなのか？

「そんなわけないじゃないですか。私の依代には結界が何重にも張ってあって、普通の人間には認識すらできないんですよ」

「じゃあ、誰が盗んだんだよ？」

「わかりません。私の結界を破れるのは死神か同じ護神くらいのものだと思うんですけど……」

「……死神ね」

まぁ、神様が存在している以上、死神がいても別におかしくない。

……ってことは、もしかして天使や悪魔みたいな存在も実在するのか？　人間に白い羽が生えたような、黒い身体に角や尻尾が生えた感じのが。

なんか格好良いな。一度でいいから見てみたいかも――

「――って、待て待て。神様ってお前以外にも居んの？」

「はい、私を含めて四人。それぞれ、役割を持ってます」

「役割？」

「護神っていうのは、本来、星を統べる存在なんです。土地神って言えばわかりやすいですかね？　詳しく説明すると長くなるので割愛しますが、私は主に星や人間の生命を司る護神なんです」

良くわからんが、ファミレスで料理を作る係と持っていく係があるように神様にもいろいろ役割分担があるのか。

――って、待てよ。もし、コイツが生命を司る神様じゃなかったら、依代が盗まれなかったら……俺はそのまま死んでいたってことか？

「あっぶねぇ！　……お前の依代盗まれて本当によかったわ」

「良くないですよ！　依代がないと私は殆ど力が使えないんですよ！　ただでさえ、貴方の傷を治すのに残ってた力を使ってしまったのに……」

「おぉ……そりゃ、悪かったな」

「私達、護神は四人の力で星を制御してますから、私が今のまま力が使えないと世界のバランスが崩れてしまうんですよ」

「はぁ、バランスねぇ……」

「多分、後一週間かそこらで星の生態が変わるんじゃないですかね。

不思議生物が現れたり、地震や台風みたいな異常気象が起きたり……」
「……ん？」
「環境とかも変わって、人間が住める星じゃなくなっちゃうかもしれないんですよ！」
「なくなっちゃうかもしれないんですよ！　――じゃねぇ！　大問題じゃねぇか！」

そんなに大事だったの！？　てか、後一週間とか殆ど時間がねぇじゃねぇか！

「ってか、何で盗まれたんだよ！？　お前、依代……ってか家出て何してたんだよ！？」
「え、あ、いや……それは……その……」

何やら、小声でごにょごにょ言っているが良く聞き取れない。

「えっと……少し、地球の様子を見て回ってまして……」
「地球の様子？　神様なら、特殊な力で地球の中とか見えるんじゃないのか？」
「見えますけど……その、実際に参加したかったと言いますか……」
「参加？　何にだよ？」
「……アニメフェスタとか夏コミとか」
「……」
「……」
「……アニメ、フェスタ？」

あれ、おかしいな。事故の後遺症で耳がおかしくなったかな？

「――って、んな訳ねぇだろうが！　何だ、アニメフェスタって！

？　お前、神様だろう！？」
「神様がアニメ好きじゃいけないんすか！？　アニメは人間の作った文化の中でも最高のものですよ！」
「お前、本当に神様なの！？　ってか、神様が人間の文化で一番評価してるのがアニメとか笑えんわ！」
「アニメを馬鹿にしないで下さい！　『マジカル天使☆ココロちゃん！』は神アニメですよ！！」
「知らんわ、そんなもん！　お前、さっき自分のこと星や人の生命を護る神様とか偉そうに言ってそれかよ！？」
「いいじゃないですか！　神様だって、息抜きしたかったんですよ！」
「それで、自分の家盗まれてりゃ世話ねぇわ！」
「だから、探すの手伝ってくださいって頼んでるじゃないですか！」
「アニメのイベント参加してて家盗まれたんで探すの手伝えとか、お前、言ってて恥ずかしくねぇの！？」
「探さなきゃ地球が大変になっちゃうんですよ！　そんなこと言ってる場合じゃないでしょう！？」
「ごもっとも！！」

と、いう訳で、少し白熱しすぎた俺と神様は一旦落ち着つくことにした。

「話を戻そう。俺達が争っても何も解決しない……」
「……そうですね、無意味な言い合いでした」

とりあえず、今までの話の要点を纏めてみよう。
まず、この神様はうっかり散歩中（？）に家を盗まれた。
家を盗まれた神様は一人じゃ何も出来ないので、助けを求めることにした。
死にかけの俺を助けて契約。さぁ、二人で家を取り戻そう！

「……何で俺？」

思えば、まずそこからだった。

わざわざ力を使って俺を助けてまで、何で俺と契約したんだ？

「資質の問題です」

「資質……？」

「私達、護神は依代がないとこの地に身を留めて置けないんです。簡単に言いますと、家がないと死んじゃうんですよ」

「ふむ」

「なので、今、私はあなたの身体を仮の依代にすることで、一時的に家の代わりにしてるんです」

「で、その資質が俺にあったと」

そういえば、さっきも魂が融合しているとか、思考を一部共有できるとか言ってたっけ。

成程、だから死にかけの俺を助けてでも、契約を交わさなきゃいけなかった訳だ。

「本来なら、こんな無理やりな方法ではなく、ちゃんと順を追って力を貸してもらうつもりだったんですが……」

「話をする前に俺が死にかけたと……」

「はい。私が護神としての力を使うにはルールがあって、あの時、貴方を助けるには契約をするしかなかったんです」

聞けば、神様は自分の意思で自由に力を使えない——使うことが許されないのだそうだ。

例えば、一人の少年が怪我で死にそうになっていて、それを助けたとする。

その少年は神様のおかげで生き延びることができた。けど、もし同じ時間、別の場所で同じ目に遭っている女の子がいてその子が助からなかったら不公平になってしまう。

神に見放されたと言えばそれまでだが、神様が自由に現世の事柄に介入することで幸福になる人と不幸になる人が増えるのは、今の世の中を混乱させてしまうことになる。

人間の世界は人間が作るべきものだ。

いくら、奇跡で救われる人がいても、その内、その奇跡に頼らねば生きれなくなってしまう。命令されなければ動かない機械のように、神様なしでは生きられなくなる。

だからこそ、力を使うには厳密なルールがあるのだ。

それが、契約――神様が起こした奇跡の分の対価を、その人間が払うことで帳消しにする。神が唯一その力を自由に使える方法――いうなれば等価交換だ。普通に考えれば、奇跡を起こす以上、そんなことは至極当然のことに感じられるだろう。

だが――

「？　その言い方だと契約がヤバいものみたいに聞こえるぞ？」

――何のリスクもなしに契約なんてものができれば、そもそも力を使うルールなんて必要がないわけで。

「神の契約は絶対です。破れば、その身に災いが降りかかります」

「……」

「……」

「……え？　つまり、俺がお前の依代を見つけられなかったら？」

「……契約違反で、貴方に災いが降りかかります」

……なん、だと？

「ちなみに災いって……どんな？」
「私の知っているのですと、契約を破棄した人間は人間としての存在を剥奪される……とかですかね」
「人間としての存在を剥奪される？」
「人間でも霊でもなく、いわば概念としてこの世界に固定されるんです。例えば、今貴方は病室にいますが存在を剥奪されれば、その姿は他の人には見えません。貴方はそこにいるけど、誰にも見えません。何にも触れません、何も出来ません。貴方という存在は世界に在るにも関わらず、貴方という存在は消えてしまうんです」
「つまり、何にも出来ない透明人間になっちまうってことか？」
「はい……あくまで私が知る限りは、ですが」

他にもあるかもしれないってことか。けど、多分内容はそこまで変わらないだろう。
神様との契約を破れば、死ぬよりも辛い罰が下されるってことだ。

「……すみません」
「別に、お前が謝ることはねぇだろ」

あの時、生を望んだのは俺だ。
いくら他に選択肢のない無理やりな契約でも、俺が生きるために自分で選んだんだ。
それに、契約を護りさえすれば何の問題もない。用は後一週間でコイツと一緒に盗られた依代を盗り返せば良いだけの話だ。

「むしろ、礼を言わなきゃいけねぇくらいだろ」

本当は死ぬはずだった命を救って貰ったんだ。
その借りを返すためなら、依代の一つや二つ取り返してやるよ。

「まぁとにかく、これからよろしく頼むぜ神様……っていうか、お前名前は？」
「神様に名前なんかあるわけ無いじゃないですか」
またしても、「何を言ってるんですか、当然のことですよ？」――と言わんばかりの態度だ。
とはいえ、名前がないと呼ぶときに困る。
「ははっ。じゃあ、俺が付けてやるよ」
「何か、犬や猫に名前を付けるようなノリですね……嫌な予感がするんですけど？」

うん、俺もそう思う。
我ながら、いい笑みを浮かべてるんだろうなぁ。

「お前の名前は、お前の好きな『マジカル天使☆ココロちゃん！』に因んで……ココロちゃんだ！」
「ちょッ！？」
「うん、我ながら可愛くて良い名前だな」
「や、止めてくださいよ！　何でそうなるんですか！？」
「ちなみに俺の名前は神凪一騎（かんなぎかずき）だ。よろしくなココロちゃん」
「だから、ココロちゃんは止めて下さいってば！」

余談だが、何故彼女が俺の上に乗っていたかというと……ココロちゃん曰く、依代が新しくなったせいで離れるのが難しくなったからしい。
今は慣れたのか、この部屋くらいまでの距離なら俺から離れられるが、基本的には俺の側から離れられない――と、いうより離れてしまうと存在を維持できないとのこと。

まぁ、いろいろ言いたいことは山程あるが――全て纏めると、俺は神様と契約して地球（俺）の平穏のために盗まれた依代とやらを探すことになっちまったということだ。

第二話　幼馴染は天才児

ふと時計を見てみると、俺が事故にあってから二時間程しか経っていないことがわかった。
ちなみに、神様は『ココロちゃん』と呼ばれるのはどうしても嫌だというので、漢字一文字で『心』と呼ぶことにしたのだが――

「呼び方は変わってないじゃないですかー！」

――と、せっかく俺がいい名前を付けてやったのに、ぎゃあぎゃあとうるさく騒ぎまくるので、カチンと来た俺は絶対に『心』以外の名前は付けないと宣言してやった。
最初は、「何でですかー！？」とか「別の名前にしてくださいー！」とか叫んでいたが、これ以上、文句を言っても俺が聞かないとわかったのか、渋々ながらこの名前に妥協して一件落着。脱線していた話を元に戻すことにした。

「で、だ。これからどうする？」
「向こうの目的は大体読めます。依代を破壊するのではなく、奪ったということは私の力を狙っているのでしょう」

本来なら、依代と護神はセットだ。
依代を手に入れること＝護神の力を手に入れるという図式になる。
だが、このアニメ好きはその定石から外れていたせいで、偶然にもその中身を奪われるのだけは防げた。
とはいえ、依代と一緒にいれば、奪われる前に迎撃できたはずなので別段誉めるべき所ではない。

「相手にしてみれば、刀を盗もうとしたら鞘しかなかったみたいなもんだな」
「そんな感じですね……」
本体がなければ、依代に価値はない。
いくら凄い神様の家でも、そこに神様がいなきゃ力は使えないんだ。
「……私の力も一騎さんの治療で消耗してますし、こちらからできる探索には限りがあります。基本的には向こうから仕掛けてくるのを待つ形になりますね」
「仕掛けてくるって、まさか拳と拳で戦ったりとかするのか？」
「おそらく……話し合いで解決できるなら、それが一番なんですけど」
「マジかよ……」
常識的に考えて、神様の結界を破壊するような相手に普通の人間が戦えるわけがない。
俺も護身術として格闘技を覚えてはいるが、それでも素人に毛が生えたレベルだ。まず、瞬殺されるだろう。
「大丈夫です。私が力を使って、一騎さんの基本能力を底上げします。ゲームで言う強化の魔法ですね」
「え、そんなことできんの？」
確か、神様の力を使うにはルールがあるとか言ってなかったか？
「護神としての能力ではなく、普通に力を使うだけですから。わかりやすく言いますと、私の神様の力は特性やスキルみたいなもので、

普通の力は魔力で使う魔法みたいなものです」
「成程な、俺を助けた時に使ったのはスキルで、戦うのに使うのは魔法ってわけか」

スキルは使うのに条件があるけど、魔法は自由に使えるわけだ。
とはいえ、スキルも魔法も発動に使うＭＰは同じとのことで、依代もなく力も消耗している今はそんなに大きな魔法は使えないらしい。

「そう聞くと、マジでゲームだな」
「とはいっても、私は攻撃魔法的なものは使えない白魔導師みたいなものなんですけどね」
「……補助と回復がメインってことか。まぁ、お前は星や生物の命を司る神様だしな」

実は攻撃が得意なんですよ。とか言われたら逆に驚くわ。

「戦いは一騎さん頼りになってしまいますけど、補助や防御、回復でサポートすればそうそう負けないと思います」
「荒事は俺が担当か……まぁ、契約だからしようがねぇ。お前が補助に回るのなら、とりあえず死ぬことはないだろ」
「勿論です！　流石に、命までかけろとは言いませんよ。それに、一騎さんを死なせるようなことになれば、私の契約に違反することになりますし……」

――“天寿全っとうするまで、俺を死なせない。代わりに、護神の依代となり彼女の願いを叶える”。
これが、正確な俺と彼女の契約内容だ。
普通に考えれば、死にかけてた俺を助けるだけで充分と思うだろうが、心曰く、互いの契約内容が対等でなければ契約は結べないら

しい。
神様の家代わりになるのは、俺の思っている以上に大変なことらしく、その上俺は彼女の依代を探す手伝いを要求されている。寿命まで俺の身を護るくらいでないと対価としては釣り合わないらしい。

「一騎さんは、私が必ず護りますよ」

「でも、その前にいろいろ準備しないといけないですけどね」と笑顔の一言。
どうやら長い間生きてきただけあって、心もこういう戦いは初めてではないらしい。
聞けば、数百年前にも何度か護神の力を狙う術士達と戦ったことがあるとのこと。

「ははっ、そりゃ頼もしいことで」

心の余裕からみて、結構何とかなりそうだった。
まぁ、俺にしてみれば、事故に遭おうと、戦うことになろうと、死ななければ何の問題もない。
俺は死にたくない。生きて護らなきゃいけない約束があるからだ。
だから、今回の件は確かにいろいろ大変だが、今後の生命保障が付いた分、ラッキーとも思っていたりする。

「オーケー、わかった。……大体の事情は飲み込んだし、説明は終わりでいいか？」
「そうですね、後はとにかく動かないことには始まりません」

それはそうだ。話も終わったし、そろそろ病院の先生を呼んで退院させて貰おう。
それから、依代を取り戻すに当たって必要な準備をして行動開始

だ。

「……ふむ。とはいえ、相手が動くのを待つというのは些か後手過ぎると思うが？」

「まぁ、それは俺も思う」

「ですけど、探知の範囲に依代の反応がない以上、私の力ではどうしようも――」

――ん？

「ならせめて、相手が攻めてきた時のシュミレーションくらいはした方がいいだろう？　ぶっつけ本番など愚か者のすることだ」

「……」

「……」

「ん？　どうした、固まって？」

「葵サン、イツカライタノ？」

「お前が『マジカル天使☆ココロちゃん！』とか叫んでる辺りからだ。ノックもしたし、声もかけたが、返事がなかったので悪いが勝手に入らせてもらった」

つまり、俺が心をからかってた時には既にいたのか。

ってか、話半分聞かれてんじゃねぇか。やべぇ、心のことどう説明すればいいんだ？

話半分聞いてたってことは、神様云々も微妙に聞いてただろうし、下手な誤魔化しはコイツには通じないぞ。

「大丈夫ですよ、普通の人間に私の姿は見えません。結界を張ってますから」

毎度お馴染みの「何を言ってるんですか、当然のことですよ？」

と言わんばかりの笑顔。
思えば、神様の姿が見えないというのは、アニメとかゲームの世界ではお決まりのことだ。
まぁ、ここは現実だけど……とにかくそのお決まりのおかげで助かった――って、待て。つまり、葵には俺が一人で厨二みたいなこと言ってるように見えてるってことじゃねぇか！
「で、お前達は何の話をしていたんだ？」
「いや、待て葵。勘違いするな、俺は別に厨二って訳じゃなくてだな……って、お前達！？」
おい、心！　お前の姿は見えないんじゃなかったのか！？
「……」
「……」
「……あれ？」
「あれ？　じゃねぇよ！？」
「おかしいですね……」と言いながら、心は葵の前で手を上下に振る。視線はばっちり合っていた。
「……ふむ。状況から察するに、本来なら私は君が見えてはおかしいのか？」
「そうですね。結界は正常に作動してますし、見えるはずないんですけど……」
「それは、絶対に見えないものなのか？」
「いえ、人間でも素質……わかりやすく言いますと霊感みたいなものがあれば見えます」
「なら、私がそれに該当するんじゃないか？」
「なんですかね？　それほどの力は感じないんですけど……」

「先程の会話で、君は力が弱っていると言っていたな。その影響で、感覚が衰えているのではないか？」
「可能性は否定できませんね。現に貴女の力を見落としているみたいですし……」

……アレ、おかしいな？
話半分しか聞いてないはずなのに、何か俺以上にこの状況に順応してないか？

「そうでもない。殆ど推測の域で話をしているからな」
「……お前まで心読むなよ」
「お前がわかりやすい顔をしているだけだ。……あぁ、それと今の会話で、彼女がお前の心を読むことが出きるというのもわかったぞ」
「ふわー……凄いですね」
「……まぁ、コイツの頭は普通の天才のレベルを軽く超えてるからな」
「それはいくら何でも大袈裟だ。誰だって、一言二言の会話で充分相手のことを理解できるものさ」
「そうなんですか？」
「んな訳ないだろ。……お前はコイツと話しててコイツのことなんかわかるか？」
「あー……頭が良いってだけはわかります」
「世辞は良い。それよりもお前達の事情を聞かせて貰いたい」

話半分で大体の状況を推測できてはいても、やはり内容が気になるんだろう。
とはいえ、戦いの危険がある以上、俺としては一般人である葵を巻き込みたくはない――んだけど。
「……私は、お前達の役に立つと思うが？」

「えっと……」

「……どうします？」と、いう視線を送ってくる心に頷きを返す。正直、葵を巻き込みたくないが、隠すにはもう手遅れだろう。むしろ、下手に隠そうとすれば、コイツの正確からして勝手に首を突っ込んでくるのは確実。それで危険に巻き込んでは、話しても話さなくても同じことだった。

「あはは……」

俺の心情を察したのか、苦笑いを浮かべながら心は葵に俺にした時と同じ説明を始める。……面倒なことが一つ増えちまったな。

◇◆◇◆◇◆

「……ふむ、成程な。後一週間でその依代とやらを見つけないと、星の生態バランスが崩れて地球は人間が住めない星になる上、一騎は契約を果たせずその身に災いが降りかかると。すると、現状問題になるのは――」

流石に二度目とあって、心の説明もかなりスムーズなものだった。要点を聞くだけで大まかの状況を把握してしまう葵の理解力もあって、五分と経たずに説明は終わったのだが、流石にそう簡単に受け入れられることではないのか、葵は聞いたことを頭の中で反芻しながら何やらぶつぶつと理論的なことを呟いている。

「とはいえ、俄かに信じられることではないな……」
葵の視線は、目の前で宙に浮かんでいる心に向けられていた。
言葉で証明するより実際に見た方が早いと思い、俺が宙に浮きながら説明するように頼んだのだ。
「理屈屋のお前としては、まだ納得できないか？」
「……そうだな。――と、言いたい所だが、残念なことにむしろ得心がいった。お前は知らないだろうが、私はおそらくその契約の現場に立ち会っている」
「なに？」
「お前が意識を失った直後、お前の身体は一瞬眩い光に包まれた。今まで気のせいだと思っていたが、アレがお前達のいう契約だったのだろう」
とはいえ、アニメやゲームじゃあるまいし、人間の身体がそんな簡単に光る訳がない。
葵も、最初は気が動転していたこともあって、光の反射で錯覚を起こしたと思っていたらしいのだが、いざ救急車が到着して応急処置をしようとしたら俺の怪我は既に完治していたというのだ。
何かの間違いだと思ったが、いくら調べても俺の身体には何の異常もなく、病院での精密検査でも何の問題も見当たらないと担当の医師も匙を投げ出したらしい。
「結局、お前が目覚めるまで医師の言葉も半信半疑だったが、今の説明が本当なら全て納得がいく」
確かに、大怪我が一瞬で治るなど、それこそ神にしか出来ない奇跡だ。
身体が光ったのは、おそらく心が神様の力で俺の怪我を治療した

時のものだろう。

「――それに、お前が信じたのなら私も信じるさ」

「……当然のことだろう？」と、言わんばかりの絶対的な信頼の目。

これだから困る。コイツは昔から、俺に対してだけは疑うことをしない。

「……俺としては信じて欲しくなかったんだけどな」

「残念だがそれは無理だな……」

幼馴染暦十七年、お互いのことは家族のように知り尽くしていた。俺がコイツを信用しているように、コイツもまた俺のことを信じてくれている。

でも、だからこそ、葵にはこんな危険なことに首を突っ込んで欲しくなかった。

「何より、お前の現状の原因は私を庇ったせいだろう？　責任は私にある」

「……そんなことを言ったら、原因はトラックの運転手だろ」

「罪の意識の問題さ。大人しく協力させろ、それで私の気が楽になる」

助かったとはいえ、自分のせいで俺に大怪我を負わせた責任を取りたいってことか。

「……わーったよ、但し無理だけはするなよ」

「あぁ、私は今のお前と違って『普通』だからな」

神様の借家になった俺は普通じゃないってか。
まぁ、確かに常識的に考えれば異常事態だけどな。

「……冗談だ」

背まで伸びた長い黒髪を靡かせながら口元に笑みを浮かべる葵。
心程じゃないが、こうしてみると葵も髪が長いな……って、そんなこと言ってる場合じゃねぇ！

「で、だ。心……これからどうすんだ？」
「あ、はい」

これまで俺と葵の会話を黙って聞いていた心へ話を振る。
多分、勝手に会話に混ざるのは失礼とか考えていたんだろうけど、問題の中心が黙ってちゃ話が先に進まないだろ――って、その前に。

「あぁ、悪い。もう降りていいぞ」
「あ、はい」

許可を得た瞬間、すとん――と椅子に着地する心。
「実は、ずっと浮いてるのは結構しんどいんですよね～」なんて笑顔で言いながら、横目でそっと葵の様子を伺っている。
これは想像だが、俺を巻き込んだことを葵が怒ってるんじゃないか……みたいなことを考えてるんだろう。俺に言わせれば無用な心配だけどな。

「……で、どうすんだ？」
「はい。えっと……とりあえず、これから敵の襲撃に備えた準備をしようと思います。今の状態で戦闘を行うのはなるべく避けたいですから」

「ふむ。……話に割り込んで申し訳ないが少しいいか？　ココロちゃんに聞いたいことが――」
「もう！　葵さんまで、ココロちゃんって呼ぶの止めて下さい！　せめて、心と呼んで下さい！」

流石に、アニメのキャラの名前で自分のことを呼ばれるのは恥ずかしいらしい。
それが証拠に、先程からココロちゃんと呼ぶと人が変わったように怒り出――

「全く、『マジカル天使☆ココロちゃん！』の主人公のココロちゃんに失礼じゃないですか……！」

――前言撤回、怒りのベクトルが微妙に違っていた。

「ふむ。では、心……聞くが、依代を奪った相手に本当に心当たりはないのか？」
「……はい。この百数年、これと言った諍いを起こした記憶はないですし」
「確か、結界を破れるのはお前と同じ護神か死神くらいのものだと言っていたな。同族がお前の力を狙っているという可能性はないか？」
「有り得ません。私達の力……特性は個人によって異なります。炎と水が共存できないように、他の三人が私の力を手に入れてもまともに使えませんよ」
「では、死神は？」
「ないこともないと思いますが……可能性は低いと思います。死神と私達は根本的に『違う存在』ですから」
「違う存在？」
「神様の種類が違うってことか？」

まぁ、確かに護神と死神じゃ、『神』という名が付いていても別物っぽいけど。

「私達の役割は、先程お話した通り、星や命……つまり『生』を護ることです。対して死神は、命を狩り、死者を送る……文字通り『死』の神ですから」

「……命を狩るって、俺達人間を殺すってことか？」

「はい。人間に限らず、星が命の許容量をオーバーしないように彼らは生物を殺すんです」

「……どういうことだ？」

「つまり、星に存在できる命には限りがあるということさ。おそらく、それを超えると星は命の重さに耐えられなくなるのだろう。……だから、死神は生物を殺して命の数を減らす」

「？」

「えっと……今、一騎さんの乗ってるベッドに私や葵さんが乗ったらどうなりますか？」

どうもこうも、女の子二人乗せたくらいじゃ何も変わらないだろう。

「じゃあ、そのベッドにこの病院全ての人間が乗ったらどうなりますか？」

「そんなの……」

「壊れちゃいますよね。重さに耐え切れずに……」

「ベッドは星で、乗っている人間が命か。例えが上手いな、バカでもわかる」

「うっせーよ」

つまり、ベッドが壊れないように上に乗っている人間を殺すって

ことかよ。
確かに、星を護るためにはそれ以外に方法がないのかもしれないけど、どんな理由があろうと人を殺すのに納得なんか出来ねぇぞ。
「納得できないという顔だな。まぁ、それは置いておけ」
「……わーってるよ。今は関係ねぇ」
「えっと、簡単に言いますと……私達と死神は性質が真逆なので、私の力を欲しがるとは思えません」
確かに、護ると殺すは正反対だ。
俺も死神が生命を司る神の力を手に入れようとするは思えないな。
「……話が少し逸れるが、死者を送るというのは成仏させるということか？」
「はい。死神は死者の魂を成仏させ転生させるのも仕事です。ただ殺すだけでは、魂は『この世』に残りますから『あの世』である輪廻転生の輪に送るんです」
輪廻転生の輪ね。さしずめ天国と地獄って所か。
「……つまり、死神が魂を『あの世』とやらに送らない限り、死者の魂はこの世に残り続けるということか？」
「はい。死者の魂を向こうに送れるのは死神だけですから。私達、護神でも死者の魂を導くことはできません」
管轄が違うってことか。神様も万能って訳じゃないんだな。
まぁ、神様が全知全能なんてのは人間が勝手に考えた妄想でしかないんだし、むしろ現代でこんな神様のシステム知ってるのは世界でも俺達くらいのものだろう。

「……ふむ」

質問は終わりだと言わんばかりに、腕を組み顎に右手を添える。葵が何か難しいことを考える時の癖だった。

これが出る時、大抵、葵は俺達なんかじゃ想像もつかないことを考えている。あらゆる可能性、どんな小さなことも視野に入れて頭を働かせているのだ。もしかしたら、今の会話に何か思う所でもあったのかもしれない。

――だが、その答えが葵の口から出ることはなかった。

「――ッ！　なんだ！？」

一瞬のことだった。部屋の――否、病院内の空気が変わった。痛いというかピリピリとした感覚。今まで感じたことのない未知の感覚が俺に襲いかかっている。

「……ふむ。私の気のせいでなければ、空気が変わったか？」

「あぁ、何か嫌な感じだ」

どうやら、葵も同じ異変を感じ取ったようだ。

一見、表情に変化はみえないが、眉間に少し皺が寄っている。原因は大体予想が着く――それは葵も同様だろう。俺達は同時に心の方へ向き直った。

「これは……結界です。病院全体に何者かが結界を張ったようですね。体性のない普通の人間は時が止まるだけの簡単な結界ですが……」

やはり、予想通り。これは敵の襲撃だ。

とすれば、まずい。俺だけならまだしも、ここには葵が居る。何とかしてこの場から彼女を逃がさなければ――

「一騎……おそらく手遅れだ。私を逃がそうとか考えているなら、この危機を乗り越えることに頭を使え」

「そうですね。一騎さんには申し訳ありませんが、葵さんには付き合ってもらうしか無さそうです」

だが、俺の思考を先読みしたかのように――事実、心は俺の思考が読めるのだが――二人は、既に覚悟を決めていた。

「やはり、葵さんは素質があるみたいですね。結界内で動きが止まっていないのが証拠です」

「喜ぶべき所ではないな。この状況では、その他になっていた方が安全だっただろうに」

とはいえ、引く気は欠片もないがな。と強気な態度。

「葵さんの周りに結界を張ります。少なくとも、この程度の結界しか張れない術者が相手なら突破されることはありません」

「つまり、その間に俺達で結界を張ってる術者を見つけて倒す訳か」

葵の身の安全が保障できるのであれば、とりあえず俺に文句はない。

まだ相手は何も仕掛けて来ていないが、結界を張って傍観ということはないだろう。そう遠くない内に何か仕掛けてくるはずだ。

待っていても後手に回るだけ、不利な状況を打開するにはこちらから打って出るのが一番いいだろう。

「なら、先手必勝だ！　行くぞ、ここ――」

――ろ？

「って、あれ、心……？」

気が付けば、目の前に居たはずの心の姿が消えていた。
周囲を見渡しても、その姿が発見できない。文字通り消えてしまったのだ。

『ここです』

声は頭に直接響いた。同時に、何やら身体に温かいものが宿っているのがわかる。

『今の私が力を使用するには、依代の中に入らないと駄目なんです。まぁ、アニメで言う合体みたいなものですね』

つまり、心は俺の中に居る訳か。
けど、どうするよ？　確か、お前ももう残りの力が少ないって言ってたし、いくら合体しても力が回復するわけじゃないんだろ？

『葵さんに結界を張って、一騎さんの身体能力を強化します。でも、余力がないので強化していられる時間は十数分って所です』

「……時間をかけるなってことか」

そう呟いた瞬間、淡く身体が輝く。
正直、あまり実感はないが、どうやら強化とやらは上手く発動したらしい。
葵の方を見ると、その身を覆うように綺麗な金色の光が葵を護っていた。

確かに結界の強度はの方が高そうだ。素人目にも、病院に張られた結界は心の張った結界より質が低く脆いのがわかる。

『葵さんの結界の方に力を結構使ったので、サポートはあまり期待しないで下さい。私が護る――とか、偉そうなこと言ったのに申し訳ないんですが……』

「状況が状況だ。文句を言うつもりはねぇよ」

『すみません……』

「謝るなって。お前は何も悪いことはしてない」

むしろ、俺より葵を優先して護ろうとしたのは正しいことだ。

もし、コイツが自分の都合のみを考えて葵を見捨てようものなら、俺は契約を破ってでもコイツに反抗したかもしれない。

「勝ちゃあ……問題ねぇんだろ？」

『はい。こっちの準備は完了です』

「よっしゃ、今度こそ行――」

――行くぜ！　と言う前に、病室の扉が勢い良く開かれた。

第三話　キョンシー軍団大行進

雪崩のような――という表現が相応しいだろう。
こちらの出鼻を挫くかのように部屋の扉は開かれ、勢い良く中に入ってきたのは大量の人間達だった。
一見しただけでも十人以上居る。扉の向こう側にも居ることを考慮すれば三十人はいるだろうか。

「まずいな。部屋の中では退路がない……」

即座に入口を塞がれ、葵が苦々しい顔でそう呟く。
だが、とりあえず心の結界があれば、彼女の身の安全は保障できる。後は、俺達がどうやってこの状況を乗り切るかってことだが――

『……キョンシーですね』
「きょんしー？」

何だそれは？　何かの魔法の名前か？

「キョンシー……中国に伝わる妖怪の一種だ。わかりやすく言うと吸血ゾンビみたいなものだよ」

そういえば、昔、映画でそんなものを見たような気がしなくもない。

「でも、何でコイツらがそのキョンシーだってわかるんだよ？」
「全員、両腕を前に突き出しているだろう？　キョンシーは死体だ

から死後硬直で間接が曲がらないのさ。だから、バランスを取るために腕を前に出す。それに部屋に入ってきた時、両足を揃えて器用にピョンピョン跳ねていたしな」
『それとキョンシーの額についている紙を見てください』
「紙？」

見れば、目の前のキョンシー達の額には何やら紅い文字みたいなものが書かれた紙が張ってある。

『呪符です。あれでキョンシー達を操っているんでしょう。本来、キョンシーに意思はありませんから』
「じゃあ、あの紙を取っちまえば良いのか？」
『いえ、あの紙は操作のためのものですから。むしろあの紙を取ったら無差別に行動して手に負えなくなります。結界内に居る他の人達に被害が行く可能性がありますね』
「ならどうすりゃ……ッ！？」

どうすりゃいいんだよ！？　と、言う前に敵に動きが起こる。
流石に、いつまでも話をさせる気はないらしい。キョンシー達は一斉に俺達の居る方へと向かって跳んできた。

『キョンシーに傷をつけられると毒素で動けなくされます！　怪我だけはしないで下さい！』

無茶言ってくれる。コイツら地味に動きが早いんだぜ。

「って、避けれる？」

思っていた以上に、身体が動く。普段の倍は早く動けているのではないだろうか。

前から飛んでくる単調な攻撃をかわし、周囲を確認。一対多数な以上、下手に動けばあっという間にお陀仏だ。

『これは、マズいですね。どんどん増えてます……』

心の言う通り、部屋の中にいるキョンシーの数は少しずつだが増えていた。

強化のおかげで攻撃は対処できているものの、囲まれてるこの状況をどうにかしないとジリ貧だ。

「葵！」

「大丈夫だ。心の結界は優秀だよ」

見れば、葵に襲いかかろうとしたキョンシー達は結界に弾かれている。

けど、結界があるとはいえ、そこまで余裕の表情が出来るお前はやっぱり格好良いよ。

「ってか、こっちも結界を張れば良いんじゃね！？」

『強化と結界でＭＰ切れです！』

「回復の薬が欲しい！」

思えば、今日コイツは俺の怪我を治すのに力を使っちまってる。

その上、俺の強化と葵を護るための結界まで使ったら力尽きて当たり前だ。

「ってか、コイツら硬ぇぞ」

とりあえず、回避してるだけじゃ埒が明かないと思って殴ってみたが、死体だからかどうかはわからないがやけに硬い。

倒れてもすぐ起き上がってくるし、あまり攻撃も効果がないみたいだ。
逆襲とばかりに向かってくるキョンシーの群れを受け流しながら、反撃して隙間を作る。
ダメージは与えられないにしても動く隙間を作らないと、このままじゃ押し潰されちまう。

『一騎さん！　キョンシーの弱点を突きましょう！』
「弱点？」
『キョンシーは鏡に弱いんです！　鏡を盾に部屋から追い出しましょう！』
「この部屋のどこを見れば鏡があるんだよ！？」
『じゃあ、火です！　キョンシーは吸血鬼に近い性質ですから火に弱いんです！』
「この部屋のどこに火があるんだよ！？」
『一騎さん、魔法とか使えないんですか？』
「使えるわけねぇだろ！」

変な漫才させるなよ。ただでさえ、一杯一杯なんだぞ。
っていうか、何か段々キョンシー達の動きが早くなってきたような気がするのは気のせいか？

「一騎！　キョンシーは時間をかけると硬直が徐々に解けていく。そのうち普通の人間のように動き出すぞ」
「って言われても、殴っても蹴っても効いてないんだぜ！？」

左右から向かってくるキョンシーを蹴っ飛ばして、ベッドの後へ逃げる。
後は窓だ、完全に退路が絶たれた。これ以上は逃げ切れないし、避けられない。

「誰も真正面から戦って勝てとは言っていない！　お前達の力があれば、いくらでも対応できるんじゃないのか？」
「俺の治療と強化、結界でＭＰ切れだ！」

ってか、ＭＰって言い方するとマジでゲーム気分だ。
とはいえ、力の残量とか言うより言い易いし、心もＭＰって言い方してるから特に正式名称はないんだろうけど。

「って、そんなことどうでもいいんだよ！　おい、心……この状況どうすんだ！？」
『……術者を探すしかないでしょうね』
「術者？」
『このキョンシーはおそらく病院の死体を使ったものです。硬直が治っていない所を見ると作ってまだあまり時間が経ってないのでしょう。この手のキョンシーは術者を倒せば、体内の魂が抜けて元の死体に戻るはずです』
「術者を探すって言ってもよ……」

探すにしろ、逃げるにしろ、この状況を突破しなきゃ始まらない。
攻撃は効かないし、数は多い。窓から逃げようにもここは３階だ。

「……あくまで私の推測だが術者は結構近くに居ると思うぞ」
「何でさ？」
「これだけの数のキョンシーを遠隔操作するのは難しいだろう。近くの方が操作にかかる負担は少ないはずだ」
『そうですね。少なくとも同じ階にはいるはずです』
「探知できないのか？」
『ＭＰが足りません……』
「回復の薬が欲しい！」

後々聞いたことだが、心曰く、結界はかなりＭＰを消耗するらしい。
それも万が一がないように強度を極限まで上げているため、消費する力も通常の数倍という桁外れのものだと言う。
そのおかげで葵に危険がないのだから俺としては問題ないが、このピンチを打破できる可能性が減っているのは現実として大問題だった。

『こうなったら仕方ありません……残ったＭＰで必殺技を使います！　一度しか使えませんから、その隙に部屋を脱出して下さい！』
「必殺技！？　お前、攻撃技は使えないって言ってなかったか？」
『ふふふ、正確には対キョンシー用の必殺技です。今、思いつきました』
「不安しかねぇ！」
『なんでですか！？』

今思いついたとか、不安要素以外に何がある！

「……話は良くわからないが、何とか出来るなら急げ一騎。このままでは、キョンシー達に嬲り殺しにされるぞ」

結界を突破できないと判断したのか、室内のキョンシー達は全部俺達の方に向かって来ている。
確かに、今はまだ対処が出来ているが、これ以上動きが早くなったらそれも怪しい。

「でも、効かなかったら一気にやられるぞ！？」
『大丈夫ですよ！』
「……その自信はどこから来るんだよ」

「心が自信あると言っているのなら、今はそれに賭けるしかないだろう。どの道、このままじゃやられるのは時間の問題だ」

少し引っかかる物言いだが、確かに葵の言うことは最もだった。賭けに出るには些か早い気もするが、他に手がないのもまた事実。それと、これは後々わかったことだが、どうやら心が俺の中に入ると外に居る人間には声が聞こえないらしい。

だから葵も『心が自信あると言っているのなら――』などと、遠まわしな言い方をしていたのだ。

俺が葵の言葉に引っかかりを感じたのもそれが原因だったのだが、現時点の俺はそれに気付いていなかった。

とはいえ、それは当然のことだ。葵は俺の声を頼りに会話を予測して話に混ざっていたのだから。

思い返してみれば、確かに葵と心と直接的な会話こそしていなかったが、こんなにスムーズな会話されたら気付けって言う方が無理な話だ。

「まぁ、確かに文句言ってられる状況じゃねぇか……心、頼む！」

『はい。一騎さん、手を上に突き出して下さい！』

こうなりゃ、一か八だ。目の前に群がるキョンシー達を蹴り飛ばし、両腕を上に突き出す。

『――いきますよ！　これが必殺のシャイニングフィンガーです！』

――そう叫んだ刹那、突き出した俺の両手が眩い光を放つ。

あまりの眩しさに目を開けていられず、思わず目を瞑ってしまった。

それは葵も同様らしく、目を瞑る前に見た時はこちらから視線を外していた。

『今です！　一騎さん、部屋を脱出しますよ！』

声に反応して目を開けると、目の前――否、室内に居たキョンシー達は一体残らず身体が燃え上がっていた。

余程の苦しみなのか、こちらに攻撃していたキョンシー達も呻き声を上げながら混乱しており、今までのような統率が取れていない。

「……何したんだ？」

『説明は後です！　早く、脱出して下さい！』

「お、おう！　ちょっくら行って来る！」

「……あぁ、待ってるから早く倒して来い」

そんな葵の言葉を背に、バラバラに動くキョンシー達を掻き分けて部屋を脱出する。

部屋の外に居たキョンシー達は、先程の現象を回避していたのか、普通に俺達を襲ってきたが、室内よりも数が少ない上、廊下がこれだけ広ければ如何様にも対処できた。

攻撃を受け流し、蹴り倒し、廊下を走る。

「で、さっき何したんだよ？」

『たいしたことはしていません。太陽光を擬似的に再現しただけです』

「太陽光？」

『ほら、さっきキョンシーは吸血鬼に性質が近いって言ったじゃないですか』

言ったか？　あぁ、そういえば漫才してた時にそんなこと言ってたっけ。

『吸血鬼は日の光に弱い。これは子供でも知ってます』
「性質が同じキョンシーも同じく日の光に弱いってことか」
『はい。ですから、日の光に当たると火傷のような症状が出たり、溶けたり燃えたりするんですよ』
「だから、身体が燃えてたのか……」

確かに、自分の身体に異常が起これば隙は出来る。
普通なら無理でも、強化した今の俺なら突破できるかもしれない隙が――

『上手くいって良かったです。まぁ、もう完全にＭＰ切れで使えませんけどね』

何だかんだいっても、ただの目くらましだからな。
キョンシーには効果絶大でも言うほど力を消費しないから、今の心でも使えたってことか。
とはいえ、それももう使えない以上、次に同じ状況になったら終わりってことだ。

『時間がありません。葵さんの結界はまだしばらく持ちますけど、一騎さんの強化は後十分も持たないと思います。早めにケリを着けましょう』
「わーってるよ」

でも、手がかりが何もないんじゃ探しようがないぜ。
とりあえず、強化で速度が上がってるおかげで、キョンシー達からは何とか逃げきれてるけど――

「――って、この病院廊下長くね？」

ふと気付いたことだったが、思えば異常事態だ。俺は今、走る速度が上がっているんだぞ。
しかも無駄話の最中、ずっと廊下を走り続けて突き当たりに着かないってどういうことだ？

『そういえば……』

心もこの違和感に気が付いたのか、何やら思いつめたような声を出す。
不穏な空気だ。もしかして、俺達はまたヤバい状況に陥ったんじゃないのか？

「何か、同じ景色が続いているような気がするんだけど……？」
『……もしかしたら、敵の罠に嵌ったのかもしれません』
「罠？」
『ほら、よくアニメとかであるじゃないですか。同じ場所をぐるぐる回らせる敵の妨害的なものが』

ただ単に長い廊下――っていうには、流石に長すぎる。
とすると、やっぱり心の言う通り俺達は罠にかかって迷子になっちまったってことか。

「……どうすんだよ？」
『どうしましょう……』

駄目だ。頼みの神様はＭＰ切れで役に立たねぇ。
とりあえず、適当な部屋に入ってみるか。何かわかるかもしれないし――

「って、あれ？　扉が開かねぇ……」

堅いとかそんな次元じゃない。マジでびくともしないぞ。
まるで、壁に扉の絵を書いたみたいに、開かないのが当然みたいだ。

『多分ですけど……この廊下そのものが異空間みたいなものでしょうから、脱出するには空間を破壊するしか手がないかと』
「どうやって破壊すんだよ？」
『一騎さん、超能力とか使えないんですか？』
「使えるわけねぇだろ！」

っていうか、むしろその手のことはお前の分野だろう。
どうするんだよ？　部屋が開かないってことは窓も駄目だろうし、打つ手がないじゃねぇか。

『……いえ、そうでもないですよ。これだけの空間を外部から作り上げられるとは思えません。多分、術者もこの空間の中に居ると思います』
「ってことは、その術者を倒せば出られるってことか？」
『多分、ですけどね。居なかったら正直どうしようもありません。それに、相手もそんなことは百も承知でしょうし、簡単に見つけられるとは思えませんけど……』

相棒はＭＰ切れ、こっちも強化時間は残り七、八分って所か。
このままグダグダやっててもぶっ殺しにされるだけだ。術者が内部にいるという確証はないが、それでも見つけなきゃ俺達に勝ちはない。
とはいえ、心の力を当てに出来ない以上、地道に探すしか手はない。けど、そんなのはどう考えたって相手の術中に嵌ってるってことだろう。

「くそ……頭脳労働は俺の担当じゃねぇんだよ」

こういう謎解きみたいなのは、どっちかというと葵の担当だ。
アイツがここに居てくれれば、何かヒントを見つけてくれたかもしれない。
けど、今は俺達しかいないんだ。二人でどうにかするしかない。
とはいえ、俺にしてみればまだキョンシーを相手にしてた方が楽だ。
こういう頭を使うパズルみたいな戦いは俺の性に合わねぇ。

「せめて、お前のＭＰが残ってりゃなんとかなったかもしれないんだけどな……」
『……』
「……どうしたよ？」
『……いえ、何か変な音が聞こえませんか？』

音？　いや、特に変わった音は聞こえねぇぞ。
目を瞑り神経を集中させて音を探ってみるが、やはりそんなもの聞こえ――いや、聞こえる。

「何だこれ、足音か？　それも一人二人じゃねぇぞ」
『！　キョンシーが追いついて来たんですよ！』
「……マジかよ。いくら居空間とはいえ、俺達結構走ったぜ？」
『あ、ほら一騎さん。後ろ、後ろを見て下さい！』

振り返り、目を凝らす。
確かに、まだ遠めで良く見えないが俺達が走って来た方向から何かが迫って来ている。

「でも、ピョンピョン跳んでないぜ？」

『死後硬直が解けて普通に走ってるんですよ！』
「……それってヤバくね？」
『とりあえず、逃げましょう！　また囲まれたらお終いですよ』

先程までは、キョンシーの動きが単調だったからあの数の攻撃を対処しきれていた。
だが、死後硬直が解け、人間と同じように動けるようになったあの数のキョンシーを相手に勝てる訳がない。最初は善戦できても、いずれは数の暴力の前に屈することになるだろう。

「こっちに探す暇を与えないつもりかよ！」

止めていた足を再び動かすが、強化を維持できる残り時間は約六分。
とりあえず、走っていれば捕まらないだろうが、こちらには時間がない。このまま逃げていても、いずれは強化も切れてどうしようもなくなる。

「ＭＰ切れの神様と、ただの人間でキョンシーと戦えるかな？」
『無理に決まってます！』
「ですよねー」

一対一ならまだしも、相手はかなりの数だ。真っ向勝負になれば、何の力もない俺達じゃ勝機はないに等しい。
とすれば、俺達が助かるにはこの異空間を脱出するためにキョンシーを操ってる術者を倒す以外に道はないのだが、その術者がどこにいるのかわからない。

……あれ？　この状況、既に詰んでるんじゃね？

いや、待て待て。諦めたらそこで終わりだ。とにかく走りながら、どうにか対処法を考えるしかない。
とはいえ、残り時間は後僅かだ。
せめて、制限時間がなければまだどうにでもなるが、残されてる時間は六分しかない。そんな短い時間でこの状況を突破する方法を考えろとかどうやったって無理だろ。

『……これは、少し無茶しなきゃ駄目ですかね』
「何とか出来るのか！？」
『あまり、気が乗らない方法ですけどね……』

正直、使いたくありません――と、心にしては珍しくキッパリと難色を示している。
だが、追い詰められたこの現状でそんなこと言っていられる余裕はない。
このままじゃ最悪死ぬかもしれないのだ。お前の力が当てに出来ない今、可能性があるならそれに縋るしかないだろう。

『……仕方ないですね』

渋々と言わんばかりに口を開く。
心が提案してきたその方法は、確かにこの状況を打破できるかもしれないものだった。

第四話　苦渋の選択

それは、一騎と心が部屋を飛び出してすぐのことだった。

「日光を再現してキョンシーの弱点を突くとは……いやはや、あの護神を少し甘く見てましたかな」

心の目くらましで身体が燃え上がったキョンシー達の先、たった今二人が飛び出していった入り口にその男は現れた。

現れたと言っても、別に何もない所から急に現れた訳ではない。ただ普通に、当たり前のように歩いてその男は部屋に入ってきた。

「とはいえ、完全に燃やし尽くせなかったことからみても、やはり彼女はもう力が残っていないようですね。あのまま続けていれば、キョンシーを行動不能に出来たでしょうに……」

「……」

身体に残る小さな火に苦しみもがくキョンシーを眺めながら、男は表情一つ変えずに冷静な分析をしている。

そして、そんな男の行動を室内に残された一人の少女は黙って見つめていた。

「……まぁ、それはそれで好都合です。このまま、一気に追い詰めますかね」

そう呟くと、男は懐から札のようなものを取り出し、何やら呪文のようなものを唱え始める。

聞き覚えのない言葉だ。どちらかといえば、お経に近いだろう。良くアニメやゲームでこの手の術者が術を使うような手順そのものと言っていい。

そんな呪文を数秒にも満たない時間で唱え終えると同時、室内のキョンシー達の身体を燃やしていた残り火が一瞬にして消え去った。

「護神を追いなさい」

そう指示を出すと、室内に残っていたキョンシー達は一斉に部屋の外へ出て行く。

「さて……」

仕切り直しとばかりに、男はこちらに振り向いた。

見た目は平凡で、特に目だった特徴がある訳ではない。身長はそこそこ高く、身に纏った白衣はよれていて長年使っている感じがする。歳はおそらく三十代前半、ネームプレートには長倉（ながくら）という名前が書いてあった。

「初めましてお嬢さん。長倉と申します」

「……残念だが、初めましてではないな」

お嬢さんと呼ばれた少女――瀬名葵は、心が残した結界内から陰湿な笑みを浮かべる男にそう返す。

実際、初めて会った訳ではなかった。

何故なら、この長倉という男はこの病院に運び込まれた一騎の精密検査をした医師その人だったのだから。

「……長倉という男に会うのは、これで二度目だ」

そして、彼女が知る長倉という医師は、こんな馬鹿丁寧を意識したような喋り方はしていなかった。

「そうでしたか、これは失言でしたな」

「……わざわざ、そちらから姿を見せてくれるとは思わなかったな。余裕の表れか？」

「ええ、まぁ。お連れのお二人は、私の作った無限回廊で仲良く遊んでいらっしゃいますし、何の力も持たない人間一人なら取るに足りませんからね」

そう言いながらも、何が起きても対処できるだけの間合いは取っている。

何だかんだ言いながらも、万が一が起こらないようにしているのだろう。だが、それは同時に『この相手は用心深い』という情報を葵に与えてもいた。

「……ふむ。察するにその身体を乗っ取っているのか？　心……いや、護神が人間の身体を依代にしなければ何も出来ないように、お前もその人間の身体を使わなきゃ何もできないと？」

「ほぉ、なかなかの洞察ですね。ですが、私がこの人間本人だとは考えないのですか？」

「お前が最初から私達の敵だったら、一騎を診察した時、既に護神に手を出していただろう？　わざわざ一騎の意識が戻るのを待ってから行動を起こすことにメリットなど何もないからな」

「……」

間髪いれずに返されたその答えに、思わず男は言葉に詰まった。

なかなか所の話ではない。この少女は、これまでの経緯や今の状況からあらゆる可能性を模索している。

こちらの一挙手一投足だけではなく、言葉――いや、声や息遣い

からでさえ彼女はいろいろな情報を得ているのだろう。

「……これはこれは、かなり頭の切れる方のようだ。こちらから話を振っておきながら失礼な話ですが、貴女との会話は避けた方が賢明のようですね」

「……それは、残念だ」

この反応からみるに、どうやら葵の推察は概ね当たっていたようだ。

とはいえ、謎が多少解けた所で、この状況はどうしようもなかった。

相手の物言いから考えて、今二人は敵の罠の中にいると考えていいだろう。

葵も、こちらの思惑通りにあの二人が敵を倒す――などと楽観的なことを考えていた訳ではないが、まさかこうも簡単に敵の術中に嵌るとは思っていなかった。

だが、考えてみれば自分で戦いを挑んで来るのではなく、大量のキョンシーを操って攻めてくるような相手が真っ向からの勝負に持ち込ませてくれる訳がなかったのだ。

（……あの馬鹿共が、完全に敵の掌で遊ばれているな）

何だかんだ言っても一騎は頭が悪い。

心の方はまだ知恵がありそうだが、あの子も素直すぎるきらいがある。両者とも、罠にかけるのはそう難しくないだろう。

むしろ、相手が心の力の限界を予測できていたのなら、妨害してくる方が自然だ。迂闊に飛び出させたのは失策だった。

（……だが、いくら突然の奇襲で落ち着きをなくしていたとはいえ、この状況はマズいな。私は結界があるからまだいいが、一騎達の方

はキョンシー達が追撃に行――）

――そこまで考えた直後、自分の言葉に妙な違和感を感じた。

突然の奇襲――それは、おかしくないか？　あれだけの数のキョンシーを用意し、一騎達を捕らえた罠を張るにはかなりの時間がかかるはずだ。

一騎と心が契約を交わしたのが約二時間前。心が言っていた通り、キョンシーをここの死体で作ったとしたら、製作時間や罠を仕掛ける時間を考慮に入れても、心がここに来た時にはもう敵はこちらの居場所に気付いていたということになる。

（あまりにもタイミングが良すぎないか……？）

無論、偶然にも予めキョンシーを準備していた所へ心がやってきた――という線もなくなないが、それはいくら何でも都合が良すぎるだろう。

病院に着いたと同時に、敵の警戒網にたまたま引っかかったにしても、やはり仕掛けてくるタイミングが良すぎる気がする。

まさかとは思うが――

「……最後に一つ、聞きたいことがある」

「……」

「別に、無理に答えなくても良い。――“見ればわかる”」

「……良いでしょう。お答えします」

間違いであるなら、それでいい。

偶然であるなら、それはこちらの運が悪かっただけのことだ。

だが、もし……もしもだ、自分の立てたこの仮説が正しかったとしたら――

「――あの事故は、貴様の仕業か？」

――私は、この男を殺すかもしれない。

◇◆◇◆◇◆

「で、その方法って何だよ？」

前は、無限に続いているであろう特殊な異空間。
後は、永遠に追ってくるであろうキョンシー達。
終わりのない廊下を走りながら、見事に追い詰められたこの状況に涙が出そうになった。

『……』

おまけに、頼りの神様はエネルギー切れでどうしようもないと来てる。
本当に、この現状を何とか出来る方法があるというのなら、今の俺達にはそれ以外の選択肢なんか残されてないだろう。

なのに――

『……』

仕方ないですね。と、口にしてから長々一分。心は一向に話をす

る様子を見せなかった。

「おい、まさかこの期に及んでまだ言いたくねぇなんて――」

『――本当に危険な方法なんです！』

「！？」

『本当に……本当に……ッ！』

――本当に、何でこんなことになってしまったんだろう。

そんな自責の念が、ひしひしと伝わってくる。

わかるんだ。今の俺とコイツは一心同体だから。

心は、自分の不甲斐無さを悔いてる。俺を護ると言いながら何も出来ない自分が許せないんだ。

その上、俺に危険が及ぶ方法でしか今の状況を対処できない。それが尚更、もどかしさを感じさせるんだろう。

「わーってるよ……」

わかってるよ。本当は、こんなはずじゃなかったってことは。

お前も俺も、何があっても対応できる状態で戦うことを想定してた。

仮に今日敵と戦うにしても、そのための準備をしっかりしてから――ＭＰ不足を補う策を講じてからだったはずだ。

だが、突然の奇襲。それも、（言い方は悪いが）足手まといを護るために残りの力を使い果たし、追い込まれた状態で戦いは始まった。

冗談言ったり、ギャグ言ったり、何だかんだで落ち着いてるように見えたけど、やっぱりコイツも焦ってたんだ。余裕がなかったんだ。

「……でもよ。世の中って奴は、こんなはずじゃなかったことばっ

かりなんだよ」

俺を危険に遭わせたくないのはわかる。

そんな方法しか提案できない自分に腹が立つのもわかる。

けどな――

「――どんなに一生懸命否定しても、これが今の俺達の現実なんだ」

なら、前を向くしかないだろう。

「俺は、ここで死ぬ訳にはいかない。お前が俺を護れないのなら、俺は俺を護るために力がいる」

別に攻めてる訳じゃねぇよ。でも、現実見ないで逃げてても結局は死ぬだけだ。

前にも言ったけど、俺は死ななければそれでいいんだよ。

だから、そんなに自分を責めるな。

確かに、この状況はお前のせいかもしれないけど、俺はそれでお前を恨んだりはしねぇよ。

「……危険でも、生き残れるならそれで良いんだよ。危険でも、死ななければそれで良いんだ」

お前のせいだとか、状況がどうとか、もうどうでも良いんだよ。

――俺は、俺の意思で、戦うことを選んだんだ。

「例え、どんな結果になっても後悔なんかしない。もっと俺を信じろ」

契約とか、護神とか、そんなのは関係ない。
この状況の原因がお前で、そのお前に戦う力が無くても、別に良いんだよ。
その時は、俺がお前を助ける。
元々、死ぬはずだった俺を助けてくれたのはお前なんだ。その恩を返すためなら、多少の危険なんか気にしねぇよ。

「わーったか？」
『……はい』

俺の考えが、心が読めるからこそ、その言葉が嘘じゃないとわかるのだろう。
搾り出したような小さな声だったが、その返事は覚悟を決めたと言っていた。

「で、どうするんだ？」
『……私の力が使えない以上、この状況を何とかするには一騎さんの力を使うしかありません』
「俺の……力？」
『一騎さんは、私の依代になれるだけの資質があります。使い方をわかっていないだけで、潜在的には大きな力を持っているはずなんです』

その力を使ってキョンシー共を倒し、この異空間を突破するって訳か。
成程な。確かに言われてみれば、神様の家代わりになれるってことは、俺はそれだけの力を持っているってことでもある。
――自分に使う力がないなら、別の所から持って来れば良い。
焦りすぎてて気付けなかったけど、良く考えれば当然のことだ。

『ですが、いくら一騎さんの資質が高くても、普通の人間が身に余る力を使うのはかなりの負担がかかるものなんです。おいそれと使えるものじゃありません』
「負担ね……それが、お前の言ってた危険ってやつか」
『はい。大きすぎる力は身を破滅さます』

人間が常に脳にリミッターをかけて自身の力をセーブしてるのと同じだ。
普通、人間は二割程の力しか使ってない。それは、強すぎる力に身体の方が耐えられないからだ。無理に力を引き出せば人の身体はその力に耐え切れず崩壊する。

『目が見えなくなったり、身体のどこかが動かなくなったり、性格が変化したり、記憶がなくなったり……症状に個人差はありますが、過去に力に目覚めた人間は、殆どの者が肉体的、精神的に、何かしらの異常が起きています』
「……つまり、俺もそうなるってことか」
『絶対ではありません。可能性は低いですが、何も問題が起きないということも有り得ます』

とはいえ、そんなものは望み薄だろう。
人間である限り、限界を突破するにはリスクがかかる。

『……どうします？　今なら、まだ取り返しがつきますよ』
「……お前の正直な感想は？」
『一騎さん程の資質でも、何の影響も出ないという確率は低いと思います』

まぁ、そうだろうな。でなきゃ、ここまでコイツが渋るはずがな

い。

『……私としては、あまりやりたくはありません』

「とはいえ、残り時間は後三分くらいだろ？」

結構、話し込んだし、身体を強化していられる時間は後僅かだ。

それに、どちらにしろもう手は残ってないんだから迷う余地もない。

「答えは変わらない。……やるぞ、死ぬよりマシだ」

『……わかりました』

心にしても、俺にしても、これが最終確認だった。

だが、それでも出した結論は変わらない。俺は、俺を護る力がいる。

例え、それで不自由な目にあうことになったとしても、その結果を選んだのは俺だ。後悔だけは絶対にしない。

『……私も覚悟決めます。もし、何かあったら好きなだけ私を恨んで下さい』

「あいよ」

『……では、今から強化に使っている力の残りを使って一騎さんの力を目覚めさせます』

「待て。……ってことは、強化が一時的に切れるってことか？」

『はい。ですが、一騎さんの力が目覚めればすぐに再強化できますし、キョンシー達も私の力で対処できます』

つまり、後は俺次第ってことか。

仮に上手く力が目覚めても、それをコントロールする必要がある。

とはいえ、そこは心がフォローしてくれるだろう。一番の問題は

力の覚醒による身体への影響だ。
身体や五感、精神に影響が出るにしろ、それを無視してすぐ戦えるかどうか。
もし、目が見えなくなったり、足が動かなくなったりしても、俺が動揺せずに戦えるかどうかだ。

『……そこは運に任せるしかありません。どんな影響が出るにしろ、私もできる限りサポートします』

――失敗は許されない。
キョンシー達との距離から考えても、俺達に残されてるチャンスは一度だけだ。

『確認します。――まず始めに、残りの力で一騎さんの力を目覚めさせ、それを制御。その後、反転してキョンシーを一掃、異空間を突破して術者を叩きます。……何か質問はありますか？』
「ない」
『では、始めます――』

第五話　目覚め＆駆け引き

まず、最初に感じたのは、ぬるま湯に浸かっているんじゃないかと思ってしまうような程良い温かさだった。
まるで、体内から温水でも出ているのではないかと思えるくらい、どんどん身体が中から温かくなってくる。
これが、心の言う“力”なのだろうか？
全く未知の感覚だ。心にテレパシーを初めて使われた時も驚いたが、今感じているこの感覚はそれ以上と言って良い。人間というものはこんな力を持っているものなのか？

「すげぇ、なんか不思議な感じだ。これが力ってやつなのか……？」
『いえ、これはまだ私の力で一騎さんの力を刺激しているだけです』
「？　じゃあ、この温かいのは？」
『身体が温かく感じるのは、刺激された一騎さんの力が活性化しているからです。……気を抜かないで下さいね、本番はこれからですよ』
「へ？　本ば――――――――んッ！？」

――質問を返す前に、それは起こった。

「あ……がッ……ッ！」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛
い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛
い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛
い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛

い痛い。

何だこれ、何だこれ！　何だこれ！？

痛いなんてものじゃない。まるで、神経の中に無理やり何かを通そうとしているような、そんな尋常じゃない激痛がいきなり襲ってきやがった。

本番って、こういうことかよ。油断してた俺も悪かったけど、こんなに痛いなら先に言っておいて欲しかった。この痛みは、心の準備なしじゃかなりキツいぞ。

『耐えてください！　目覚めた力を外へ出すために回路（パス）を作ってるんです。一度、身体に回路（パス）が出来てしまえば、この痛みもすぐに消えますから』

「ぐッ……ッ！」

そんなこと言っても、痛いものは痛いんだよ。

身体も、燃えるように熱くなってきた。

——一秒が、凄い長く感じる。

時間が過ぎるのって、こんなに遅かったのか。

「は……あッ」

『……ゆっくり、ゆっくり、呼吸を整えて下さい。もう少しで回路（パス）が出来上がります』

無理だ。呼吸整えるとか、無理。

痛くて、それ所じゃない。こんなに涙が出そうになるの初めてじゃないかってくらい、痛みが身体を駆け抜けていく。

これは、今まで経験した痛みとはまるで別物だ。これに比べたら、今まで感じた痛みなんて痛みとは呼べない。それだけ、痛みのレベルに差があり過ぎる。

「あぁ、ぅ……ッ！」

――わかる。身体に何か線っていうか、道みたいなものができてる。

これが多分、心の言う回路（パス）ってやつなんだろう。

にしても、この痛みは本当にヤバい。神経がゴリゴリ削られているみたいだ。息をするのも辛い。

こりゃ、力が目覚めることによって肉体や精神に異常を起こした奴がいるって言われたのも満更不思議な話でもないぞ。

『もう少しです。もう少し……』

「ぅ…ッ、っあ……！」

まだか？　まだ終わらないのか？

――“痛い”

もう、随分経ったんじゃないか？

――“熱い”

いくらなんでも、長すぎないか？

――“苦しい”

早く、早く、早く終わってくれ――

「ッ……あああああああああああああああああああああああああああああっ！！」

思わず、声をあげて叫んでしまった。
血が滲むほど拳を握り、噛み砕くくらい強く歯を食いしばる。
――無論、そんなことじゃ痛みは消えない。
けど、少しでも痛みから気を逸らさなきゃ、頭がどうにかなっちまいそうだった。

『一騎さん……』

心配そうな声。だが、それに答える余裕はない。
言いたいことはわかる。もうすぐ回路（パス）が出来るってんだろ？
でも、少しでも気を抜けば、どうなってしまうかわからないんだ。
悪いが、今は痛みに耐える以外のことを考えられそうにない――

「――――――――ッ！！」

――一際、声にならない叫びを上げる。
同時に、今までの痛みを超える激痛が、神経を貫き頭の中へ響き渡った。
ブチッ――という、何かを切ったような感触を右手から感じる。
どうやら、拳を握り締めすぎて爪で掌を傷つけてしまったらしい。
見ると、右の掌はかなり血が滲んでいる。だが、さっきの激痛で痛みに慣れてしまったのか、普通なら痛いと感じる傷でも全く痛み

を感じなかった。

「――って、痛みが……」

ふと、気がつくと、あの神経を傷つけるような鋭い痛みが消えていた。

『お疲れ様です。やっと回路（パス）が出来ました……』

「……お、おぉ」

あれだけ痛みを感じたのに、今はもうその残滓もない。本当に、綺麗サッパリ痛みが消えてしまった。

代わりに、身体に纏わりつくような何か温かいものを感じる。

先程までのぬるま湯に浸かっているような感覚とは違う。上手く言葉に出来ないが、もっとこう……ハッキリとした力強い感じだ。

「これが、俺の力……？」

『はい……と言っても、今一騎さんが感じているのは、目覚めた力のほんの一部ですけどね。想像以上ですよ、これだけの力を持ってる人間を見たのは初めてです』

「そうなのか？」

『はい、本当に驚きです。今まで、こんな大きな力を持った人間になんて会ったことないです……って、そんなこと言ってる場合じゃないですよ！　一騎さん、何か身体に変化はありますか！？』

変化？　あぁ、そういえば力に目覚めたら何かしらの異常が起こるとか言ってたな。

と、言っても、今の所、自分でわかる範囲では特に異常は感じな

い。身体も自分の思うように動くし、五感や精神にも特に異常はなさそうだ。

「いや、特にこれと言った変化なさそうだな……」

『……そうですか。なら、良いんですが……』

「明らかに良くなさそうな声で言うなよ。まぁ、言いたいことはわかるけどな……」

『すみません……』

「別に謝ることはねぇよ。流石に俺だって、何も起きなかったんじゃないか……なんて短絡的なことは考えてないしな。けど、表向き動くのに問題が起きた訳じゃないし、とりあえず今はあのキョンシー共をどうにかするのが先だろ？」

かなり距離を取っていたと思ったが、見れば敵はもうすぐそこまで来ている。

何だかんだで時間をかけたからな。俺の身体に起きたかもしれない異常を把握できていないのは怖いが、悠長に話をしている場合でもないだろう。

『そうですね。……いえ、むしろ一騎さんの力が想像以上なのは好都合でした。これなら危険を極力避けながら、この状況をどうにかできそうです』

「へぇ……えらく強気だな。何か、秘策でも思いついたのか？」

『はい。本当なら、例のシャイニングフィンガーでキョンシー達の動きを封じている間に結界を何とかする以外に手はなかったんですが、これだけ力に余裕があるならもっと確実な方法があります』

どうやら、俺の力ってやつは相当なものらしい。

あの心が、ここまで断言するんだ。勝てるという確信があるんだろう。

さっきまでどうにも出来なかったこの状況も、今のコイツには大したことないのかもしれない。

「んじゃ、さっさとアイツらぶっ倒して――」

――って、ん？

『……どうしました？』

「いや、ちょっと……ズボンの右のポケットが――」

◇◆◇◆◇◆

最後の質問から長々一分半、一騎の病室は静寂を極めていた。

答える――と、男は口にしたが、結局、葵の質問に答えはなく、ただただ沈黙を保っている。

だが、浮かべられたその陰湿な笑みが、言葉以上に答えを教えてくれていた。

「成程な。……やはり、お前が――」

全て、仕組まれていたことだったのだ。

どうやってかはわからないが、この男は心が依代の代わりに出来る相手――一騎のことを心より先に見つけていた。

そして、心が接触するより先に潰そうとした。

下手に接触されて、力を取り戻されたら自分への危険度が増す。

心の言うことが正しいなら、この男は心を殺すのではなく捕らえよ

うとしている。
奴が欲しいのは、心の持つ護神（ゆずりがみ）の力だ。
とはいえ、一騎と心が接触されたら捕獲するのは難しくなる。仮とはいえ、依代さえあれば心は自衛の手段が出来るからだ。

――ならば、どうするか？

簡単だ。奴にとって一番危険の少ない方法。二人が接触する前に阻止してしまえばいい。
一騎さえ対処してしまえば、心に抵抗の手段を与えないまま簡単に捕らえることが出来る。だからこそ、奴はトラックの事故を装って一騎を殺そうとした。

「まぁ、結局接触は阻止できなかったようだが、結果的に心は力を消耗し……今の所はお前に有利な状況ってことか」

ただでさえ、依代から離れているせいで力が少なくなっている所に、怪我の治癒、結界、強化、目くらましと散々力を使わさせられたのだ。
常識的に考えて、心にこの状況をどうにかできるだけの力はもう残っていないだろう。

「ふふ……」

この男もそれがわかっているからこそ、わざわざ姿を見せた。
自身の勝利を確信しなければ、こんな回りくどい手を使うような奴が敵の前に姿を見せるわけがない。おそらく、一騎達は相当追い詰められているのだろう。
と、すると、助けが来るのは期待できそうにない。
むしろ、下手をすると一騎達の方が助けが欲しいくらいの状況に

なっている可能性もある。今はまだ大丈夫でも、このまま受身でいると取り返しがつかない状況になってしまうかもしれなかった。

――ならば、今後の危険性から考えても動くのはここしかないだろう。

（……ふむ。これは賭けだな）

――必要なものは、大体揃っている。

「……」

「……」

後は、この賭けさえ上手くいけば――

「……随分と余裕そうな面だな」

「……」

「まぁ、確かに状況はこちらが不利。あの馬鹿共も貴様の掌の上で遊ばれている。これも、お前の……いや、お前らの予定通りってことなんだろうし、その余裕も当然と言えば当然だが……」

「……！？」

葵の含みを持った言葉に、僅かだが男の顔に動揺が走る。

同時に、葵は内心で笑みを浮かべた。

少しでも動揺が生まれれば、それは付け入る隙となる。

どうして、どこで、いつ、何でわかった――そう言いたげな気配。
余裕の表情から一転、男の葵を見る目つきが真剣なものへと変化する。

――それは、反撃の合図。

目の前の男が圧倒的に支配しているこの状況を、葵は言葉一つで切り崩しにかかろうとしていた。

「何だ？　その物欲しそうな犬のような顔は？」
「……」
「私が、お前達が複数犯であることを見抜いたのがそんなに意外か？」

男は動かない。だが、やはりこれまであった余裕はなくなっている。
表情に出さないようにはしているが、目線や態度からも殺気や敵意を感じられる。
この男の瀬名葵という少女への価値観が“多少、頭の良い一般人”から“危険な相手”に変わった証拠だ。

「黙っていれば、何もわからないとでも？　舐められたものだ。お前のような人間の考えていることなど言葉を交わさなくても手に取るようにわかる」
「……」
「お前は、こう考えているのだろう？　『この状況で、この女に出来ることはない。この挑発のような態度も、今できる精一杯の抵抗に過ぎない。……だが――』」
「……口を閉じなさい」
「――この少女が、本当に我々のことに気がついているのなら、こ

れ以上、口を開かせるのは危険だ……』とな。……何の力も持たない女一人に臆病なことだ」
「口を閉じろと言っている！！」
明らかに挑発だとわかってはいても、完全に思考を読まれているような感覚に陥っているのだろう。
思わず叫んでしまうくらいに、この男は動揺してしまっている。
だが――
「閉じさせればいいだろう？」
――それでも、この男は動こうとはしなかった。
「口を閉じさせたいのなら、力づくですればいいだろう？　なのに、何でお前は私に手を出そうとしない？」
「ッ……」
「結界を破る呪符が足りないからか？　――いや、違うな」
会話と呼べるものはしていないに等しい。
しかし、葵には男の心中が手に取るようにわかった。
「確信したよ。やはり、お前達は複数犯で、護神の力を求めているのはお前じゃない」
心の護神としての力は、『命』、それも護りの力だ。
葵は部屋に入ってきてからずっとこの男を観察していたが、この男は護りや命を救う力を求めるようなタイプの人間ではない。むしろ、この手のタイプは逆に攻撃的な力を求めるだろう。

――なら、何故、この男は心の力を求めているのか？

「思えば、心が私に結界を張った時からおかしいと思っていた」

あの時、心は「少なくとも、この程度の結界しか張れない術者が相手なら突破されることはありません」と言った。

だが、それはおかしい。

心の依代は、何重にも張ってある結界が護っていたのだ。普通に考えて、今、葵の周りに展開されている結界がその結界に勝っているとは思えない。

もし、この男が心の依代を奪った敵なら、力が衰えている護神の張った付け焼刃の結界など簡単に突破できるはずなのだ。

なのに、この男は何もしようとしなかった。

もしかしたら、力の消費を気にしているという可能性もあったが、それもこれだけ挑発して何も行動を起こさない所を見ると違うと見ていいだろう。

「正直、確証はなかった。だが、それもお前の態度が教えてくれたよ」

この男に、心の結界は破れない。なら、破った術者が別に居る。

だからこそ、葵は敵が複数犯だと看破した。

そして、室内での行動や会話から敵の性格を読みきり、心を必要としているのがこの男でないこともわかった。

――だが、少なくとも、一騎を殺そうとしたのは、この男だ。

「……」

男は、言葉を発することが出来ずに居た。
同時に、恐怖していた。目の前の少女の特異性に――

（――洞察なんて言葉じゃ済ませられないぞ。もはや、読心能力だ）

前にも言った通り、この少女は、男の表情や言葉、態度、これまでの状況から様々な可能性を推察して推論を立てていると見ていいだろう。
だが、その可能性の範囲があまりにも広すぎるのだ。
名探偵など生温い――これは、もはや一種の超能力だ。言葉を交わせば心を読まれ、見られるだけでも人間性を暴かれる。
ただの人間？　笑わせるな。術を使う自分なんかより、この少女の方が余程化物じみている。そう感じさせるだけの力を瀬名葵という少女は持っていた。

（……いや、落ち着け。冷静になれ）

確かに、葵がこちらの情報の一端に気付いたのは驚いた。
だが、言葉巧みに誤魔化してはいるが、状況は何も変わっていないのだ。
まだ、優位はこちらにある。この少女が危険なことに変わりはないが、その言葉に惑わされては駄目だ。どんな言葉をぶつけられても聞き流さなくてはいけない。

「ふ…ふはは……」

そうだ、護神を捕らえるのも、この結界が消えるのも時間の問題なのだ。
いくら、この少女がこちらの情報を得ようと、その情報を伝えら

れなければ意味はない。護神の結界が消えた後に始末してしまえば良いだけの話だ。

「……笑うだけの余裕があるとは思わなかったな」

「何を馬鹿な。良く考えなくてもわかることでしょう？　ここで貴女が何をしようと状況は何も変わらない。貴女一人では、この状況は変えられない」

「……」

そう、その言葉は正しい。

どう言い繕おうと、結局、葵は何の力も持たないただの人間なのだ。

どんなに洞察力に優れていても、所詮はただの十七歳の少女。人知を超える術を使うこの男をどうにかする術はない。

「……っ…はははは」

――ない。はずだった。

「……何がおかしいんです？」

「いや、確かにお前の言うことは正しい。私一人では、確かにこの状況はどうにもできないだろう」

「……」

「どう足掻いた所で、ただの人間である私に出来ることはこの結界の中にいることくらいだ」

「……自棄になった。……という感じではなさそうですね」

「……礼を言うよ」

その言葉と同時に、葵は男から視線を外す。

「ありがとう。私の時間稼ぎに付き合ってくれて」

「……何だと？」

「確かに私一人では、どうしようもなかった……私一人ではな」

あからさまに含みを持った言葉。

だが、男がその言葉の意味を理解するより先に――それは起こった。

『待たせたな！　葵！！』

第六話　破滅のスイッチ

『待たせたな！　葵！！』

――それは、有り得ないはずの声だった。

「！？」

部屋中に響くようなその声に、男は思わず後ろへ振り返る。
だが、疑問が隠せなかった。無限回廊の術が破られた気配はない。
――ないが、今のは確かに神凪一騎の声だった。

「馬鹿な、どうやって回廊を――」

――抜けてきた？　そう、口にしようとした。

「え……？」

だが、振り返ったその先には誰もいなかった。
どういうことだ？　何が起こった？　どうして誰も居ない？　あの声は何だ？　いや、もしかしてこれは――そう考えた所で、長倉という医者の身体を乗っ取っていた男は自分の失態に気が付き――

「チェックメイトだ」

――振り返った瞬間、身体に強い衝撃を感じ、仰向けに倒されてしまっていた。

「……くっ」

「動くな。……動けば、首をへし折る」

咄嗟に懐へ手を伸ばそうとしたが、その行動も制止された。

首へ足を置かれ、いつでも体重をかけられる状態。

下手に動けば、葵は男の首を折ろうとするだろう。事実上、男は身体を動かすことが出来なくされたも同然だった。

「……」

「……」

完全に、あの不利だった状況を覆した。

それも、咄嗟にどうにかしたという感じではない。明らかに、葵はこの状況になることを狙っていた。

（……どういうことだ？）

普通なら衝撃を受ける場面だろう。何せ、何の力も持っていないはずの少女に形勢を逆転され組み伏せられているのだから。

だが、驚きやショックを感じる以上に、男は葵が起こしたいくつかの行動に疑問を隠せずに居た。

「何故、こうなったのかわからないって顔だな」

「……」

「まぁ、種を明かせば単純な話だ。私は、お前が振り返った隙を突いて結界から飛び出し、呆然としているお前を押し倒した」

「わざとなら趣味が悪いな……私が気になっているのはそこではな

い」
「……ふむ。一騎の声のことか？」
そう、まず一番の問題はこの部屋にいないはずの一騎の声が何故聞こえたかということだ。
「お前が聞いたのは、これだよ」
『待たせたな！　葵！！』
制服のポケットから取り出されたそれから、先程聞こえた声がリピートさせる。
「携帯電話……？」
「あぁ。……といっても、これはさっき録音したのを再生しただけだけどな」
「……」
「それにしてもうるさい声だ。……まぁ、要求通りではあるが、制服越しじゃないと耳が痛いな」
――謎が解ける所か深まっていた。
何故、携帯電話の録音機能に一騎の音が録音されていたのか？
普通に考えて、予めこんなものを用意しておくことに意味などないはずだ。まさか、この状況を想定していたとでも言うのだろうか？
それに、葵の口にした要求とは何のことなのか？
どれもこれも、答えを推測するには情報が足りなさ過ぎる。目の前の少女なら、この少ないキーワードでも大体の予想がつくのかもしれないが、混乱している男には何のことだかさっぱり理解できなかった。
「私がこの状況を作ろうと考えたのは、お前があの事件の犯人だと

わかった時だ」

そんな疑問を見抜くかのように、葵は本当の種明かしを始める。

「とはいえ、私は普通の人間だからな。一騎のように特殊な能力を得た訳ではないし、お前のような術者に何か術を使われればなす術もなくやられてしまう」

「……そう、だから貴様はあの結界から出れなかったはずだ」

出れなかったのには他にも理由がある。

この男は、例え葵が結界から飛び出して来ようと対処できるだけの距離を取っていた。

ただでさえどうしようもない状況なのに、そこまで用心深いと葵にはもう何も出来ない。

部屋には葵と男の二人だけなのだ。意識を逸らそうにも、下手に動けば罠かもしれないと勘ぐられる可能性だってある。

「だから私には、隙を作るための武器が必要だった」

だが、用心深いというのは、裏を返せば突発的な出来事に弱いと言っているようなものだ。

葵に対して油断していないという点では問題だが、逆を言えばそこがこの男の弱点にもなる。

だからこそ、葵は相手の意識を自分へ向けさせることで男の視野を狭めさせた。

何度も言うが、この部屋には二人しか居ないのだ。葵へ完全に意識を向ければ、当然他への意識は疎かになる。そこへ、居るはずのない人間の声が聞こえれば、誰だって動揺せざるを得ないだろう。

「お前を挑発していた時、私は制服のポケットの中でこういうメー

ルを打っていた」

Ｔｏ　・神凪一騎
Ｓｕｂ　・無題
添付　なし
本文
このめえるをうけとりしたいおりかえしでんわ
わたしがでてからにびゅうごにおおきなこえでまたすたなあおい
とさけべ
（訳、このメールを受け取り次第、折り返し電話。私が出てから
二秒後に大きな声で『待たせたな！　葵！！』と叫べ）

「大変だったぞ。何せ、手探りだからな……当然、時間もかかった。
誤字が多いが、まぁその辺りは仕方あるまい」
「……そうか、時間稼ぎとはそのことか」
「あぁ、後はメールが届くかどうか。……正直、これは賭けだった」

話を聞く限り、二人は異空間に囚われているらしい。
問題は、その中に居る一騎に連絡が取れるかどうか。
そして、葵に電話を返すだけの余裕があるかどうか。
後者は特に心配していなかったが、前者は大きな問題だった。何
せ、情報が全くないのだ。いくら葵でもメールが届くかどうかは全
く持って未知数だった。
とはいえ、他に手がない以上やるしかない。
それに、この賭けに勝てば、葵はあの状況をどうにかできると確
信していた。

「結果は、これだ」
『待たせたな！　葵！！』

正直、録音ボタンを押したのは偶然だったのだが問題はそこではない。
メールが送れ、電話も出来る。この事実が、葵にとっての武器となった。

「……何故、二秒も間を置いた？」
「いくら、大声を上げても、携帯自体の音量を上げなければお前には聞こえないだろう？　二秒はそのためのものだ」

結果として男は声に動揺し、後ろへ振り向くと言う大きな隙を作った。
無論、声だけではなく、後ろへ振り返るように葵も視線で男を誘導していたのだが、それが有効的だったのかどうかは微妙な所だ。

「……私を倒しても術を使うとは考えなかったのか？　この状況からでも私が術を使う可能性はあったはずだ」
「それはない」
「……何故だ？」

確信を持った言葉に、男はまたも疑問を浮かべる。

「私は、キョンシー達に張られた呪符と、この部屋でお前がキョンシー達の火を消した術を見ている」

おそらく、キョンシーに張られた呪符は奴らを操作するためのものだろう。
そして、この部屋で男が術を使う時に出した呪符。
この二つを総合して考えれば、この男が術を使うためには呪符が必要だということは容易に想像が付く。

「無論、確証はなかった。……だが、その問題は、お前を挑発していた時と押し倒した時の反応で解決した」
「反応……だと？」

あの時、葵は挑発の中で「結界を破る呪符が足りないからか？」という問いを投げかけていた。
当然、答えなどなかったが、動揺していた男は咄嗟に懐にしまってあるであろう呪符へ視線を向けてしまったのだ。
さらに、葵が男を押し倒した時、男は懐に手を伸ばそうとしていた。
この二つの結果からみても答えは明らかだ。一つだけでは偶然かもしれないが、二つ重なればそれは必然と言って良い。

「あの反応からみても、高い確率でお前が術を行使するには呪符を使う必要があると踏んでいた」
「……」

――事実、その通りだった。
とはいえ、実際は呪符がなくても術は使える。呪符はあくまで術を使うための補助機でしかない。
電卓を使えば計算速度が上がるのと同じで、呪符はあくまで術の発動効率を上げるためのものであり、必須かと言われればなくても問題はない。
問題は、術を使うには呪文を唱える必要があるということだ。
これは、呪符と違って術を使うための必須条件であり、呪文無しで術を使おうとすれば、やはり呪符が必要になってくる。
だが、現実問題、男は動くことを封じられ、呪符の使用は封じられたも同然。呪文を唱えようものなら、葵は確実に男の首を折ろうとするだろう。
結果的に、葵の予測はどうあれ、状況は完全に逆転されてしまっ

ているのだ。情けないことだが、たった一人の少女に男はなす術もなく追い込まれてしまっている。

「――お前は、二つのミスを犯した」

葵は手にしていた携帯をポケットへしまうと、整った綺麗な指を二本立ててそう口にした。

「一つ目は、勝ちを確信し、迂闊に姿を現したこと」

いくら優勢になったからといって、敵の前に姿を現すという行動は本来なら愚の骨頂――相手に反撃のチャンスを与えるだけだ。

これでは、わざわざキョンシーや異空間の罠を使って、消耗していた心に持久戦を仕掛けた意味がなくなってしまう。

実際、男は完全に勝っていたはずの状況を葵に逆転された。

もし、男が調子に乗らず、決着がつくまで大人しく様子を見ていればこんなことにはならなかっただろう。

「そして、二つ目……これは決定的だ」

――その言葉と同時に、まるで別人のように葵から表情が消える。

「お前が、一騎を殺そうとした。……その事実を私に気付かせたことが、お前の最大のミスだ」

正直、この事実が明らかにならなければ、葵はここまで大きな行動は取らなかっただろう。

一騎達が異空間を突破するのを信じて、男から少しでも多くの情

報を得ようとするだけに留まったはずだ。
――だが、この男は気付かせてしまった。
そして、押してしまったのだ。自らを敗北に導く破滅のスイッチを。

「……それで？」

とはいえ、この男がこのまま黙っている訳がなかった。
確かに、本来なら有り得ないはずの展開になった。彼女の行った、こちらの隙を作って形勢を覆すという策も見事としか言いようがない。
正直、男もこんなことになるとは夢にも思っていなかった。
だが、質問や会話で時間を稼いだおかげで、動揺していた心も多少落ち着きを取り戻すことが出来た。反撃は、ここからだ。

「……私をどうするつもりだ？　貴様もわかっているとは思うが、この身体は私のものではない。仮に、この男の首をへし折っても私は殺せないぞ」
「だろうな。……だが、お前はこの男の身体がなくなると困るんじゃないのか？」
言葉と同時に首に当てている足に力を込める。
男も、まだ完全に冷静になった訳ではないのか、今度はあからさまに動揺が顔に出た。
「……何を言っているのか、わからんな」

「お前達の言葉でいう依代っていうのは、そう簡単に見つかるものじゃないんだろう？　お前は、この男の身体を失うと次の依代が見つかるまでまともに動くことが出来なくなるんじゃないのか？」

それは、一騎達にとっての有利となり、敵にとっての致命傷。

だからこそ、男は身体を捨てて逃げるという行為をせず、こうして葵の隙を伺っている。

とはいえ、身体がなければ何も出来ないという訳ではなかった。

でなければ、この長倉という医師の身体を手に入れる前に、男が一騎を襲ったという事実に矛盾が出る。

男がこの身体を得たのは、あくまで一騎がこの病院に運ばれた後だ。一騎を襲った時はまだ身体はなく、そのせいでたいした術を使うことが出来なかった。

実際、男は一騎を交通事故に巻き込んで殺そうとしたが、もしその時にこの身体を得ていたなら、もっと確実な手段を取って一騎を殺そうとしていただろう。

「……確かに」

だからこそ、男はこの身体を捨てることが出来なかった。

確かに、長倉の身体を捨てれば、適当な術を使ってこの場を何とか出来るかもしれない。

だが、そうなれば、この少女は即座に長倉の身体を壊し、男が術を行使する前にこの場を離れようとするだろう。

――それは、男の敗北、葵の勝利を意味していた。

もし、そうなれば、結果として男は身体を失い、キョンシーと無限回廊の術は解け、出来ることもかなり制限される。

この場は凌げても、護神を捕らえることは出来ず、身体を失った

男は今後の戦いでも確実に不利な状況へと追い込まれてしまう。

「……確かにそうだ。……だが、貴様に殺せるのか？　この男を？」

ならば、前提条件を覆してしまえば良い。

人間が人間を殺せば、それは犯罪だ。

いくら未成年とはいえ、罪を背負うのに抵抗がないはずがない。

長倉の身体を壊せない状況を作り出せば、身体を捨てずにこの状況をどうにか出来る可能性も出てくる。

「――殺せるさ」

だが、そんな男の考えをあざ笑うかのように葵は即答した。

同時に、男の首にかかる足の負荷が増す。

「それが一騎の助けになるのなら、私は躊躇わない」

人間が人間を殺そうとすれば、どんなに隠そうとしても動揺や躊躇いが生まれる。

殺人鬼や犯罪者――人を殺すことに慣れている者なら、そんな迷いは起こらないのかもしれないが、相手は命の駆け引きなどしたこともないただの女子高生。普通なら、まず間違いなく動揺や躊躇いといった迷いを生むはずだ。

――だが、葵は迷わなかった。

葵は自身の価値観を自分ではなく、一騎（たにん）を基準にしている。

普通、人間という生き物は、何でも自分を一番に考えるものだ。

それは、人間として当然のことで、自分よりも他人が大切なんて本心で言う人間は精神的に壊れていると言って良い。
だが、葵は自分よりも一騎のことを一番に考えて行動している。
一騎のためなら、自分がどうなろうと構わない――それが、葵の基本思想。
例え、人を殺すことになろうと、それが一騎のためなら葵は笑顔でその人間を殺すだろう。
それは宣言通り、一騎に害を成した男が現在置かれているこの状況から見ても間違いはなく、普通の人間として明らかにおかしいと言って良かった。

「……はったりだ」
「なら、試してみるか？」

価値観を自分に置いていない時点で、葵の精神は破綻してしまっている。
だが、この状況では、それが男にとってさらに不利なものとなってしまっていた。

「悪いが、私は一騎を殺そうとしたお前を許す気はない。お前の足を引っ張れるなら、むしろ喜んでこの男を殺すぞ？」
「……」

そう笑みを浮かべる葵の表情を見て、ゴクリ――と、男は唾を飲み込む。
はったりにしては、動揺している様子がなさ過ぎる。
それに加え、先程までと変わらず、全く隙も見つからなかった。
（……普通なら欠片でも動揺が出るはずだ。だが、それがないとなると――）

――本当に、この少女ならやるかもしれない。
そう、思ってしまった。思わされてしまった。
そして、一度生まれた疑念はそう簡単に払拭できない。どんなに自分を騙しても、心のどこかで万が一のことを考えてしまう。

それは、心理戦での敗北を意味していた。

（……くっ、まさか、こんな――）

――まさか、こんな二十歳にもならない子供に、ここまで精神的に追い込まれることになるは夢にも思わなかった。

「さて……」

動揺させるつもりが、逆に動揺させられる。
あの圧倒的な状況が、こんなことになってしまうとは――

「……そろそろ、こちらの要求を聞いて貰おうか？」

◇◆◇◆◇◆

――ピッ。

「良くわかんねーけど、これでいいんだろうな」
『……何で私達、また走ってるんでしょう』

葵からのメールを受け取ってから電話が終わるまで、俺達はまた異空間を全力で駆け抜けていた。
流石に、立ち止まったまま電話するだけの余裕はなかったし、作戦の説明もまだ聞いていなかったので、それは仕方ないことだったんだが――

『せっかく、格好良く決めてたのに……』
「仕方ねーだろ、あの葵があんなメールよこすんだ。多分、向こうでも何か問題が起きたんだろうし……」

――やる気だった所に水を指されたのか、心のやる気がなくなってしまっていた。

「ほら、機嫌直せよ。とっととキョンシー倒して、ここから出ようぜ」

携帯をズボンのポケットにしまいながら、何とか心を説得する。
一応、キョンシーとはかなりの距離が空いているので話をする余裕はあるのだが、葵のことも心配だし出来るだけ早くこの状況を何とかしたいというのが本音だ。

『……まぁ、ここから出ないとアニメも見れませんからね』
「お、おぅ……そだな」

俺は、アニメはあまり見ないから良くわからないけど、心の言うようなアニメって普通のテレビで見れるものなのか？
もし、うちのテレビで見れなかったらどうしよう……って、だからそんな場合じゃないんだって！

「と、とにかく！　どうやってキョンシー倒すんだ？」

まずは、キョンシーを何とかするのが先だ。

どうも追いかけて来ている数からして、部屋に居たのも全部こっちに来ているみたいだし、ここで一気に倒せれば後はこの異空間を突破するだけになる。そうすれば、この状況も一気に逆転だ。

『一騎さんは“魂魄”って知ってますか？』

「こんぱく？」

何かアレだろ？　良くはわからないけど、魂的なアレだろ？

『人間には二つの気があると言われています。それが魂と魄です。魂は精神を支える気、魄は肉体を支える気、二つあわせて魂魄です。魂がなければ心は生きず、魄がなければ身体は動きません。一騎さんの言う魂というのは、この二つの気が合わさったものなんです』

「ふーん、それで？」

『人間は、死ぬと二つ一緒だった魂魄が別れます。魂は肉体から離れ、魄は肉体と共に消滅します。だから、映画みたいに魂を肉体に戻せば死者が蘇るなんてこと本来は有り得ないんです』

「……」

『……どうしました？』

「……そういえば、さっき死神が魂をあの世に送る的な話をしてたけど、もしかしてあれも地味に関係あるのか？」

『ええ。……まぁ、今は関係ないですけどね』

確かに、今は関係ないか。話が逸れたな。

『ええとですね……キョンシーに限らず、人形や機械を動かす術を使う際、術者はこの魂魄の魄の部分を再現するものなんです』

「再現……って、あぁそういうことか」

良く映画とかだとそういう術には人間の魂を使ってるけど、肉体を動かすのに必要なのが魂魄の魄である以上、魂は勿論、死ぬと消えてしまう魄も使いようがない。

だからこそ、特殊な術で魄の機能を再現して物を動かすってことか。

『まぁ、魂を再現する術者もたまにいますが、身体を動かすだけの魄と違って精神を司る魂を術式で再現するのは大量の力が必要なので普通はしませんね……』

「ふーん……で、それがどうしたよ？」

『……まぁ、これ以上は長くなるだけなので結論から言いますと、キョンシーを動かしている術にジャミングをかけて動きを止めてしまおうってことです』

「……」

『……』

「……え？　そんなことできんの？」

随分、簡単に言うけど、それが出来れば苦労はしないだろう。

確かに、魄がないと身体は動かないんだし、その魄を再現している術を妨害できればキョンシーを止められるんだろうけど。

『術のジャミングに必要なのは、使われている術式の把握と相手の術以上の力です』

心曰く、こういう複数のキョンシーを動かす術は、あまり術式が複雑ではないらしく、相手が術に使っている力の倍の力があれば妨害は意外と簡単に出来るらしい。

それに――

『昔、この手の術と同じものを見たことがあるので出来るはずです！』

――という、過去の経験も、心の自信を後押ししていた。

とはいえ、この作戦も本来なら力不足で出来ないはずだった。

だが、心の想像以上に容量の多かった俺の力のおかげでそれも可能になり、目くらましで燃やすよりも確実に相手の動きを止められるため、万が一の危険が少なくなった――とのこと。

「はぁ……お前って、やっぱり凄い神様だったんだな」

『何を今更……一騎さんはちょっと私を舐めてすぎですよ』

さらに驚きなことに、葵に電話をするために始めたこの不毛な追いかけっこの間に、心はこの空間の基点を見つけていたらしい。

空間を構成する術式の基点さえわかれば、この異空間を破るのはさほど難しいことではないらしく、あのキョンシー達の動きさえ止めてしまえば脱出は容易だと心も言っていた。

「いや、マジで凄いな。もしかして、お前、心の偽物なんじゃないか？」

『どういうことですか、それ！？』

「だって、さっきまで超役立たずだったじゃん」

『失礼極まりないですね！　いくら、私でも怒りますよ！？』

とはいえ、やっぱり神様だけあってＭＰさえあればコイツは優秀だな。

俺も危険を承知で、力を目覚めさせた甲斐があったってもんだ。

「まぁ、そうプリプリするなよ。ゲームクリアはもう少しなんだぜ？」
『そうですねー……せっかくのステージクリアなのに、一騎さんのおかげでテンションだだ下がりですねー』
余計なこと言ったせいで、また拗ねちまったな。
ってか、コイツって意外と根に持つタイプだったのか。
「ほら、早くこっから出るぞ？　アニメ見てーんだろ？」
『そうでした！　今日は、『マジカル天使☆ココロちゃん　Ｓｅｃｏｎｄ！』第四話の放映日でした！』
おぉう、一気にテンション上がりやがった。
ってか、今更だけど、アニメを毎週楽しみにしてる神様って本当に嫌だな。
「……まぁ、いいや。一気に行くぞ！」
『はい！　必殺のグラスパーフラッシュを見せてやりましょう！』
ちなみに、キョンシーを燃やしたシャイニングフィンガーや今回のグラスパーフラッシュというのは、例の『マジカル天使☆ココロちゃん！』のキャラクターが使っている必殺技らしい。
俺としては、そんなアニメの技を叫びながら戦うのはどうかと思うんだが、本人がやる気になっている今、これ以上、水をさして無駄に時間を使う訳にもいかないので今回は華麗にスルーすることにした。
『行きますよ！　グラスパー――』
まぁ、そんなこんなで、俺はグラスパーフラッシュとやらによっ

て、糸の切れた人形のように倒れるキョンシー達を見ながら、こんな残念な名前の技でやられるなんて嫌だろうなーとか思いつつ、心と共にこの異空間から脱出したのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3617k/

かみ☆かみ

2011年12月13日06時48分発行